
IN BLOOM ~ 聖少女と黒の英雄 ~ 番外編集

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IN BLOOM ～聖少女と黒の英雄～ 番外編集

【Nコード】

N8151T

【作者名】

羽鳥 紘

【あらすじ】

完結作・IN BLOOM ～聖少女と黒の英雄～（<http://ncode.syosetu.com/n6749q/>）の番外編集です。11/8日常編その8、11/16番外編「再会」ライオネル視点をUPしました。

その1（前書き）

ヴァルグランド編・第十六話〜十七話間のお話です。十六話までの
ネタバレ含みます。咲良視点、緩いラブコメ傾向。

その1

俺がこのヴァルグラント軍の砦に滞在するようになって、幾日か経つ。

エドワードは、噂はすぐに消えると言っていた。確かに人の噂も七十五日と言う。だが残念ながら、まだ七十五日も経ってない。七十五日は結構長い。消えるまで俺はどこにいればいいのかというと、居場所はなくて。

なんだかんだ、俺はずっとエドワードの部屋にいる羽目になっている。いや、もちろん嫌というわけではない。ないのだが。

「咲良、いつまでそんな所で夜明かしするつもりだ？ 奥を使っいいいと言っているのに」

今夜も部屋の隅で毛布を抱えてうずくまる俺を見下ろし、エドワードが呆れたような声を落とす。けど呆れてしまうのは俺の方だ。彼女はよく、こんな得体の知れない男と同じ部屋で眠る気になるよ。警戒心が薄いのは強さを伴っているからだろうけど、これじゃ気を遣ってる自分が馬鹿みたいである。

「エドワードこそ、いつまでソファで寝る気だよ？ 俺はここでいいんだよっ」

エドワードは俺が頑固だと言いたいんだろうが、俺に言わせれば頑固なのは彼女の方だ。そもそもここは彼女の部屋なんだから、その持ち主であるエドワードがベッドを空けなければならぬ理由などどこにもないのである。ましてや、彼女は女で、俺は男だ。……いくら見た目が逆であろうとも。

「女の子ソファで寝かせて、俺がベッド使えるわけじゃないじゃないか！」

そんな俺の主張に、エドワードは片手を腰に当て、少し複雑な顔をした。

「私はもう随分前に女を捨てた。今更そんな気を遣って貰わなくて

結構だ」

「そんなこと言われても、俺の気が済まないの」

「年下なんだから、素直に甘えたらいいのに」

まるで駄々っ子を相手にしているかのように、はあ、とエドワードが疲れたため息を吐く。ひとつしか違わないのに、そんなあからさまな年下扱いは心外なのだが、それを怒れるような立場にもない行き場所のない苛立ちと共に俺は立ち上がると、エドワードの手を掴んで奥の部屋へと引っ張った。

「咲良？」

「いいから、エドワードは、ちゃんとベッドで寝てくれよ！」

そして、無理やり彼女を奥の部屋へと押し込み扉を閉めようとしたのだが、今度はエドワードが俺の手を掴んでそれを止めた。

「……今宵は冷える」

そんなことは、俺だって一緒に気温を体感してるわけだし解ってる。毛布を被っても肌が冷気を感じるほどだから、寒さに強いとか弱いとかの問題じゃなく今夜は寒かった。だからこそエドワードも俺に声をかけたんだろうが、俺が引けない理由だって同じだ。

「……だから、ソファで寝るのはやめろって」

こうなると意地の張り合いである。しばし俺たちは睨みあっていたけれど。

先に目を逸らしたのは、エドワードの方だった。勝った、と俺はよくわからない勝利の余韻に浸っていたのだが、それには少し早計だった。

「わかった。それなら、一緒にベッドで寝よう」

とんでもないエドワードの一言に、俺の思考とか動きとか、色々なものが停止する。そんな俺の手を軽く引いて、彼女はこちらへと視線を戻し。

「そうしたらきつと温かい」

顔を近づけて、俺の鼻先に囁きかける。

「え……ええええ！？ えつとあああの、ええええ、うえ、あ、おお

おおッ！！」

何を言おうとしても意味のない呻きにしかならず、完全に余裕を失った俺は必死でエドワードの手をふりほどくと、無我夢中で扉を閉めた。それだけの行為が百メートル全力疾走よりも疲れて、ずると座り込んでぜーはーと荒い呼吸を繰り返す。だがようやくそれがおさまると、扉の向こうでエドワードがくすくすと笑う声が聞こえてくる。

……遊ばれた。そこでやっと気付く。

「エドワード……」

「言うことを聞かないからだ」

うずくまりながら、恨みがましい俺の声は扉の向こうの彼女にも届いたらしい。してやったりという声が、扉を通して返ってきた。

「……風邪を引くなよ、咲良」

笑い声はしばらく続いていたけれど、やがてそれは穏やかで優しい声へと変わる。そんな声を出されちゃ怒れもしない。結局、苛立ちもしてやられた悔しさも、それで全部溶けてしまっただから彼女には勝てない。おやすみと呟いて、俺は毛布を手繰り寄せる。

……今日は隅っこの指定席ではなく、ここで眠ろう。

その2

今日は朝からやけに暑い。と思っていたのに、さっきから妙に寒い。そのくせ汗が出て、頭がぼーっとして、体の節々が痛い。

これは、もしかしなくても。

「咲良、朝から気になっていたんだが、もしかして」

俺が気付いた辺りで、エドワードも気付いたんだろう。だが、彼女が手を伸ばすのに気付き、俺は咄嗟にそれを避けてしまった。

「……」

「……」

まるで弟さんのように、エドワードが眉間に皺を寄せるのを見て身構える。そして軌道を変えて向かってくる彼女の手はさっきより早くてよけ切れず、思わず掴んで止めると、逆に掴み返され捻り上げられた。

「私に挑もうなど百年早い」

そういう言葉は、彼女が言うとはひどく様になる。ああ、勝てるなんて思ってません。ただでさえ勝てないのに、こんなへるへるじゃ抵抗ひとつ試みることもすらできやしない。だが諦めて大人しくなつた俺の額にひやりとした感触があると、その直後に自由は返ってきた。だがもう今更取り繕う意味もなく、そうすると意地を張ることすら困難になって、俺はその場に崩れ落ちた。

「酷い熱じゃないか。何故黙っていた」

「……さっきまで、平気だったんだ」

ゼーゼーと息が切れる。それすら堪えられなくなりつつも言った言葉はほほ噓だった。

だって、それがばれてしまえば、彼女はきつと。

「言わんことない。だからあれほどベッドを使えと言ったのに」

言つと思つたよ。だからどうにかやり過ぎそうと思つたんだが、それにはさすがに熱が上がりすぎた。朝の時点では、大人しくして

ればなんとかなると思っただけだな。しかしこの分じゃ、今夜からは俺の言い分は通らなそうだ。それでも一応は抵抗してみる。

「でも、そしたらエドワードが風邪を引いていたかもしれないじゃないか」

「生憎だが、そんなヤワな鍛え方はしていない」

……さいですか。なんとも遅しい。

俺だつて別に病弱じゃないけど、年に一回くらいは熱を出す。そしてそのたび、馬鹿でも風邪引くのねーと姉ちゃんに野次られる。確かに俺は馬鹿だけど、だったら風邪を引かない特典くらい欲しくて、これでも体を鍛えてるつもりだ。でもやっぱ彼女のそれとはレベルが違うんだろうとは思うけど。

抵抗する術を失くした俺は、黙って彼女の肩とベッドを借りる以外の道も一緒に失くした。それ以降は、術があつても実行できないくらいに衰弱してしまった。食事も受け付けられないし、声を出そうと思えば咳が出る。こんなに酷いのは、さすがに小さい頃以来か。とにかく寒くて気持ち悪い。

でも悪化するのも無理はない話だ。

元の世界なら、調子が悪ければ医者に行き、注射の一本でもして薬を飲んで、あつたかくして寝てればそうそう何事もない。

けどここに病院はない。医者がいるのかどうかは知らないが、いたところで、魔女疑惑のかかった俺を果たして真摯に診てくれるかどうか。薬は、熱さましの効果があるっていうものは貰ったけれど、効果の程は謎だ。今のところ効いてはいない。そして、何より寒い。エドワードの分の毛布まで使ってるのに全く温かくない。当然だけど、ここにはエアコンもストーブもない。

家なら、その両方ある。母さんが消化にいいもの作ってくれて、野次りながらも姉ちゃんが水とか持つてきてくれたりする。

そんな環境に改めて感謝したことなんてなかったけど、俺は随分恵まれた場所で暮らしてたんだな。こんなときになつてそれを思い知った。

夜も更けて、寒さはますます厳しさを増す。

ここは寒い。

帰りたい、な。

温かい家を、朦朧とする意識に思い描いたそんなとき。

実際に体が温かくなった気がした。

幻想で温かくなるなんて、いよいよ俺はやばいのか、
、そう思いつつも温もりは心地よく、ようやく深い眠りに落ちることができた。

夢ひとつ見ない、真っ暗で深い眠りのあと。

気がついたら、すでに明るかった。朝になったせいか、それとも熱が引いたのか。あんなに辛かった寒さはもうなくて、ベッドの中でほっと安堵の息を吐く。ピークは過ぎたみたいだ。

そうすると、多分昨日はソファで寝たのであろう、エドワードのことが気になった。昨夜は人を気遣う余裕もなかったけど、今日はもう大丈夫だ。慌てて彼女を探そうとして、そこで俺は凍りついた。

「……な、ななななっ、」

なんで、と。誰に聞いているのかなんの意味があるのかわからない言葉を繰り返す。そんな俺の声で、群青の瞳がうつすら開いた。俺の、ほんのすぐ、真横で。

温かくなったのは、幻想でも気の所為でもなかったらしい。けどその温もりの正体を知って、引いたと思った熱が昨日以上の勢いで上昇していく。

ほんの僅かエドワードが動き、それだけで額に彼女のそれが重なる。元々そんな至近距離だったのに、これで距離はゼロになる。

「良かった。引いたな」

間近で微笑みかけられて、だけど俺はそんな彼女を思い切り跳ね

のけて起き上がる。随分な態度だと自分でも思ったけれど、取り繕うような余裕はなかった。

「無理をして起きるな。まだ少し熱い」

なのにそんな俺の態度にもかかわらず、エドワードの声は笑いを噛み殺していた。だからきつとバレている。

その熱は、風邪のせいじゃないってこと。

「……水」

無愛想な俺の声に、エドワードは返事をしてベッドを降りると、くすくす笑いながら部屋を出ていった。扉の閉まる音に、ようやく俺は息を吐き出す。呼吸すら忘れてた。

ここには何も無い　なんてことは、なくて。

ベッドにはまだ温もりがある。それはきつと、エアコンよりストーブより温かい。

医者も薬も、栄養のあるご飯がなくても、この世界も悪くないなんて思うあたり、俺はとっても現金だ。すっかり軽くなった体を動かしながら苦笑を零す。

戻ってきたら、礼を言わないといけないな。

そんなことを思う俺の耳にはもう、小走りにこちらに近づいてくる足音が聞こえていた。

その3

この世界　　というか、この国に四季があるのかどうかは知らないけれど。日本の冬くらいには、ヴァルグランドは寒かった。

「ここって、寒いよね……。いつもこういうの？」

俺の何気ない問いに、エドワードがこちらを向く。

「まあ、近頃は少し冷え込むが。大体いつもこんなものだ」

そうなのか……。夏が好きな俺としては、それは遺憾だ。寒いのはあんまり好きじゃない。そんな俺にとつてみたら、エアコンもストーブも、こたつさえもないこの世界はやっぱり厳しい。防寒具が毛布一枚というのはなんとも心許ない。

「寒いのか？」

「少しね。ストーブとかあったら嬉しいんだけど」

「すとーぶ？」

「うん、ないよね、わかってた」

妙なイントネーションで返してくるエドワードに　　この世界にないものを口にする、彼女は大抵そうやって反芻してくる、俺は少々肩を落とした。ストーブは無理でも暖炉くらいないものか。だが、この部屋に火を焚くような設備がないのは見ればわかることである。まあここは娯楽施設でも民家でもないし、命に関わるとか凌げないほど寒いわけじゃないからそれも仕方ないだろう。充実した暖房設備に囲まれた、現代っ子の俺がひ弱なだけで。そんな俺の考えを肯定するように、エドワードが口を開く。

「この皆は大きい方だが、所詮は攻防用の皆だから……。確かに過ごしやすくない。不便をかけて済まぬ」

「いいよ、我慢できないほどじゃないし」

エドワードが済まなそうな顔をするので、俺は慌てて両手を振った。それは解っていたし、エドワードに謝られるようなことじゃない。大体、彼女が平然としているのに、俺が寒いとか言っちゃ駄

目だ。我慢の子になる決意をしていると、ふとエドワードの目つきが変わった。

「なんなら、今晚も一緒に寝るか？」

「いや、いいです！」

そんな申し出に、俺は振っていた手の勢いをさらに強めて悲鳴のように叫ぶ。からかわれるのは解ってるけど、俺も単純なのでいちいち動揺してしまう。案の定くすくすと笑われて、俺は熱くなった顔を隠すように背けた。このところ、エドワードは俺をからかって遊ぶのを楽しんでいる気がする。たったひとつ年上なだけで、ずいぶんと俺を年下扱いしてくるし。

「いや済まん。可愛いからついつい」

「……それ、フォローになってると思ってる？」

「そう怒るな。寒いなら暖を取る方法はあるぞ」

俺が怒っても彼女は全く困ってはくれない。むしろ益々楽しそうに笑うのである。すっかり玩具にされていることにむくれていると、彼女はそんなことを言っただけで立ちあがった。そして、部屋の隅から瓶を一本手に取って戻ってくる。まさか、それって……

「呑めば温まる」

「いやいや。俺未成年だし」

「やっぱり酒か。だがそんな俺の声に、エドワードは首を傾げた。

「確か咲良は、十六と言っただけじゃなかったか？」

「う、うん……」

「ヴァルグランドでは十五で成人だ。それに、酒で暖を取るのに歳は関係ないだろう」

そんなものか……。そりゃ日本の常識で話しても仕方ないけど。でも酒はなあ……。一度父ちゃんに呑まされたことあるけど、一口でくらくらしで倒れるかと思った。おまけに次の日死ぬほど気持ち悪くて学校も行けなかったし。以来、さすがに父ちゃんも俺に呑ますことはなくなった。

「でもやっぱり酒はやめとくよ……。俺、弱いんだ」

「だが、寒いのだろうか？」

断る俺にお構いなく、エドワードはグラスに酒をついで、自分でその中身をあおる。一気に干してしまっても、彼女は顔色ひとつ変えず平然としていた。

「そう強い酒ではない。いくら弱くとも一杯くらいでは酔わぬだろう」

「う……」

「それとも、やはり一緒に寝るか？」

「いただきます」

何かうまくこと手玉に取られている気がするんだけど。そう言われて俺は思わず彼女からグラスを受け取ってしまった。量はさつき彼女が飲んだ量の半分程度だったけれども、匂いだけで頭が痺れる。本当に軽いのかと一抹の疑問が頭を過ぎったが、目の前で一気飲みした彼女が平然としているのだ。ここで呑まなきゃ男が廃る……というわけで、俺は覚悟を決めるとグラスの中の液体を一気に胃に流し込んだ。間髪入れず、焼けるような熱さが俺の喉と胃を襲う。こ、これ絶対軽くない！

「な、大したことないだろう。温かくなったか？」

笑うエドワードの姿がぐにやりと歪む。……なんで彼女は何ともないんだ。

何一つとして彼女に勝てないことが無償に悔しくなってきた、俺は力が抜けそうになる足を踏ん張った。汗が滲むほど体が熱くて、上着を脱ぎ捨てながら、エドワードの方に歩き出す。

「さく」

何か言いかけた 多分、俺を呼ぼうとした彼女の声が途中で途切れたのは、俺が突然掴みかかったからだだろう。ついでに、小打ち刈りの要領で足をかけると、余程呆気に取りられていたのか、あっさり彼女がバランスを崩して、俺の狙い通り後ろにあったソファに背中から倒れる。

「……まださむいから、」

すかさず被さるように押さえつけると、俺はうまくるれつが回らない口を動かし、大ウソをついた。

「あつためて」

途端、酒を一気におおつてもまるで変わらなかったエドワードの顔が、耳まで真っ赤になる。

勝った。今度こそ勝った。

心地よい勝利の余韻に浸った瞬間、俺の意識は暗転した。

ふと目覚が覚めたら、ものすごく頭が痛かった。

酷い頭痛と吐き気に襲われながら、何があつたのか必死に思い出す。それでエドワードに勧められるまま、酒を一気飲みしたことを思い出した。どうやらこれは、昔父ちゃんに呑まされたときと同じ

二日酔いというやつらしい。

しかしそこまでは思い出せても、どうにも呑み干した後のことを思い出せないのである。

いくら考えてもどう頑張ってもまるで思い出せないのです、エドワードに聞いたなら無視された。…… たったあれだけの量の酒で倒れたりして、さすがに呆れられたのだらうか……。

しかし不思議なことに、エドワードが俺をからかって遊ぶことは、この日を境に激減したのであった。

その4

ここしばらく、エドワードがろくに話をしてくれないので、俺はなんとなく気まずい日々を過ごしていた。

丁度、俺が酒を飲まされて、ぶっ倒れた日からだ。

愛想を尽かされたのかとも思ったのだが、過保護なのは相変わらずで、部屋を空けることはあまりない。だけど、一緒にいる分だけ、このどこか気まずい空気に俺は耐えきれなくなってきた。

間がもたなくて続けていた素振りが本日千回を数えたあたりで、刀を下ろして汗を拭う。

「……あのさ、エドワード」

意を決して、窓辺で本を読んでいたエドワードに声をかける。：

「いや、多分読んではいないんだけど。視線はずっと窓の外に向いていたし。と思って、素振りしながらずっと彼女を見ていた自分に気付いて、何か恥ずかしくなる。だが、その視線が外から俺に向くのを見て、俺は慌てて言葉を継いだ。

「あー、あの。何か怒らせたならゴメン」

とにかく、あの日からエドワードの様子が変わったことには間違いない。恐らく俺が原因なのだろうから謝ったのだが、彼女は怪訝そうな顔をしただけだった。

「何故、そんなことを？」

「だ、だって。怒ってるだろ？ 最近あんまり口きいてくれないから……」

おずおずとそう言うと、エドワードは小さく息を吐いて、読んでもいない本を閉じた。

「別に、怒ってはいない」

「ならいいんだけどさ……」

だけど、やっぱりそれきり会話は途絶えてしまう。いや、前だって四六時中話していたわけではないから、気にする俺がおかしいの

かもしれないけれど。それでもやっぱり気まずいと感じてしまつて、俺は無意識のうちに話題を探していた。

「そついえば、いつも何読んでるの？」

俺が素振りをしている間、エドワードは本を読んでいることが多い。ふと気になつて聞いてみると、エドワードはそのとき初めて本の存在を思い出したように、膝の上に目を落とした。

「……ああ。別に何つてほどでもない。ただの大衆本だ」

「そつなんだ。てつきり戦術書とかかと思つた」

「期待に添えなくて悪いな。これは今本国の貴族の間で流行つていゝる恋愛小説」

それは意外。意表を突かれた俺が目を丸くしていると、エドワードはふつと声を立てて笑つた。

「似合わぬか？」

「あ、いや。そんなことは」

「戦術書の方がお似合いだと顔に書いてあるぞ」

「……そんなことないつてば」

弱々しい俺の反論に、またエドワードは笑つた。似合わないとは思わないけど、意外だったのは本当だから何も言い返せない。でも、とにかくエドワードが笑つてくれたので、それには少しほつとしていた。

「……面白いの？」

聞いてみると、エドワードは笑いをおさめて、少し困つたような顔をした。ああ、そついえば読んでなかつたつて……。

「まあ、興味はあつたから読んでみようと思つたが、今一つ頭に入らぬ」

「あ、そつ……」

「……咲良はきつと、もといた世界に可愛い恋人の一人もいるのであろうな」

突然のエドワードのそんな言葉に、は、と俺は間の抜けた声を上げてしまった。

「な、何だよ急に。いないよ、そんなん」

だから失恋したばかりなんだって、言わなかったっけ俺。それも告って即フラれたから、恋人なんていたこともない。

即答した俺を、今度はエドワードが意外そうな目で見る。

「そうなのか？ 咲良、可愛いのに」

ちよつと待て、何かおかしくないか？

「……男に可愛いっての褒め言葉じゃないって、知ってる？」

「ああ。あ、いや済まん。悪気はない」

申し訳なさそうに頬を掻くエドワードを見て、俺はため息をついた。まあ悪気ないってことは、それがエドワードの率直な感想なんだろう。ちなみに、俺が好きだった先輩の率直な感想もそんなところだろう。可愛いってことはイコール、男としては見ていないってことだろうから。

女の子が男に求めることって普通、かっこよさとか逞しさだろうし。

「……エドワードは？」

「ん？」

「恋人いるの？」

あまり俺にとって嬉しくない会話をはぐらかそうと、とつさに話題を変えたけど。すぐに返ってくると思っていた返事はなかなか無かった。またエドワードが困ったような表情をして、胸に何かおかしな疼きが走る。

「えーと。俺、この世界に来た日に振られたんだよね」

その瞬間、何故か俺ははぐらかしたかった話題に戻っていた。いや、戻したかったわけじゃないんだけど。それ以上に、さっきの話を続けたくなかった。エドワードは自分のことを聞かれるといつも辛そうだったし、それに、その答えを聞いて俺はどうしたいんだって話だ。

……知らなくていいし、知りたくない。どうしてか、そう思ってしまう。

「……どんな人？」

ふと、エドワードが小さく呟く。よく聞き取れなくて首を傾げていると、すぐに彼女ははつきりした声で聞き直してきた。

「君の想い人は、どんな人だったんだ？」

問われて、ちよつと前までの日々思いを馳せる。

……学校での日常生活が、もう随分昔のことのように感じた。

「どんな人って言われても……、うーん、年上で、気が強くて、なんていうか……」

学校とか部活って言ってもエドワードはわからないだろうから、説明しづらい。

先輩は、中学校のときの部活の先輩だった。

剣道部の、女子の主将で、大会で何度も優勝してて、まあ俺より余裕で強かった。パワフルで、明るくて、でも優しく美人で、はつきり言つてモテた。所謂高嶺の花というやつで、手が届くなんて思ったことはないんだけど。

でも先輩は俺を可愛がってくれて……文字通り可愛い可愛いと可愛がってくれた。髪を伸ばした方が可愛いとか、セーラー服の方が似合うとか……、要するに遊ばれていた。俺はそんな先輩を追いかけて同じ高校に行ったものの、剣道は苦手をやめてしまった。苦手意識の理由は、いつまでも先輩に勝てないから。勝てない限り男扱いなんかして貰えなそうだけど、勝てる自信なんか全くなくて放り出してしまったんだ。そんなヘタレな俺だから、想いが届くわけがない。

ああ、なんかこうして思い返せば返すほど……

「……エドワードに似てるよ、少し」

ぼつりと、そんな言葉を零してしまう。

エドワードは少し驚いたような顔をした後に、複雑そうに目を逸らした。それから、また俺へと視線を戻す。

「……それなら、まだ振られたと思うのは早計かもな」

「え？」

「とりあえず振っておいて様子をみようという腹かもしれんぞ」

「……エドワード、そんなことすんの？」

「さあ、私は女を棄てた身ゆえ、色恋沙汰など無縁だからな。だが、似てるというから私ならどうするか考えてみた」

面白そうに笑う彼女を見て、改めて女って怖え、などと思う。こっちは必死だったというのに。

でもそれより、色恋沙汰は無縁って聞いてなんかほっとした。いや、なんでほっとしてるんだ俺？ 答えの出ない自問をして唸っている間に、エドワードが椅子から腰を上げる。

「咲良が想いを遂げる為にも、早く元の世界に戻れるといいな」

穏やかに微笑みながら、エドワードがすぐ傍まできて俺の頭を撫でる。……こういうことをされると、どう考えても身長が負けているという事実を突きつけられて、セツナイ。

「いいよ、もう……。どっちかって言えば、好きってより憧れだったし。周りが悪乗りして無理やり告らされただけで、それがなかったら言うつもりなかったし。所詮そんなくらいのことだから」

「……そうか」

エドワードは励まそうとしてくれてるんだろうけど、なんか喜べない。自分でも理由のわからない苛立ちと共に吐き出すと、エドワードは髪を撫でる手を止めた。

「ならば、そんな見る目のない女のことなど、さっさと忘れろ」

「……！？」

ふわりと体を包んだ温かさに、俺は呼吸を忘れて息を飲んだ。

「君は強くて優しい。それを解ってくれる、もっと相応しい人がいずれ現れるさ。……だから、いつか元の世界に戻っても変わらずにいてくれ」

優しく俺を抱く彼女の腕の中で、聞こえてきた言葉は少し苦いものだった。

俺の一体どこが強いというのか。俺よりずっと強い彼女に言われると、皮肉にしか聞こえない。だけど、その声も、この腕も、温か

くて優しいから、何も言えない。熱くなる頭で必死に平静を保ちながら、照れを隠すように俺は言葉を探した。

「……えっと。エドワードって、なんかお母さんみたいだよね」

間違っても俺の母はこんなに優しくはないが、過保護なところとか、こつやつて力づけてくれるところとかが、なんかザ・おかあさんという感じがする。そう思って呟くと、何故かぴしりと空気が凍った。

そんな状況に抱く既視感。

これは、姉ちゃんの気に入りの服を汚しちゃったときとか、部屋にあった先輩の菓子をそれと知らず食っちゃったときとか、エドワードの前で老け顔って言ってしまったときとかの
あの空気。

「……あ、いやその」

取り繕おうとするものの、何が彼女を怒らせたのかわからない。

……どちらにしる時すでに遅しというやつで。

結局それから数日間、エドワードは口を聞いてくれなかった。

その4（後書き）

読んで下さりありがとうございました。今のところ日常編はここまですが、そのうち気まぐれに追加するかもしれません。以降は別のシリーズになります。

その5

「……何の真似だ？」

刺々しい声を頭上に聞きながら、俺は床に頭をこすりつけんばかりに土下座をしていた。

「だから、お前を見込んで頼みがあるんだ、ライオネル」

顔を上げると、険しい表情が俺を見下ろしていた。けどその険しさには、戸惑いも少し混じっている。

まあ戸惑うのも無理はないだろう。俺も異世界で土下座が通用するとは思っていない。それでも、いけすかない相手に思わず土下座でお願いしちゃうくらい、俺は切羽詰まっていたのであった。

何故、と問われれば、それは

「ライ！ 咲良を見なかった」

戸惑うライオネルに事情を説明しようとした矢先、突然部屋の扉が開く。ノックもせず飛び込んできたのは、まさに今俺を切羽詰まらせている当人だった。そちらを向いた俺と目があうや否や、彼女は言葉半ばで口を閉ざす。そして、多分俺を探していたんだろうにも関わらず、唐突に回れ右をして退室していった。

扉の閉まる音に隠れてため息を吐きだした俺を見て、ライオネルがさっきより幾分納得いったように俺を見る。

「頼みとは、姉さんの機嫌を直せとかそういうことか？」

見透かされた問いに、俺は首を縦にふりまくった。

「もう何日も口をきいてくれないんだよ。いい加減きまずい」

「そんなもの自分で謝れよ。僕が姉さんをどうこうできるわけないだろ」

「謝って済むなら俺だってお前を頼らないよ！ お前にどうこうできないもの、俺はもっとどうしようもないじゃんか！」

そっけなく踵を返そうとするライオネルの襟首をつかみ、俺は力任せにがくがくと揺すった。

「や、やめる！ 僕は機嫌の悪い姉さんに近づきたくない！！」

悲鳴のように叫ぶライオネルの声を聞き、俺は彼を揺する手を止めた。その顔色が青ざめているのは、多分激しく揺さぶられたからというわけではないだろう、彼の言は俺にも理解できることであり、俺だって逆の立場だったら絶対関わりたくない。

「謝ったのに機嫌が直らないなら、誠意が足りないだろう」

襟元を直しながら、ライオネルにも見放され、俺はいよいよ追い詰められた。

まだこれが俺がいた世界で、姉ちゃんとか先輩なら、ケーキでも買って頭を下げればなんとかならなくもないのだが……、物で釣るなどか言うなかれ、俺なりの誠意だ。だが、この皆にケーキ屋さんとかはきつとないだろうなあ。そもそも、エドワードに何をあげれば喜ぶのなんて見当もつかない。

「……なあ、ライオネル。エドワードって、何が好きかな」

「もしかして物で釣ろうとか考えてるのか？」

うう、いちいち痛い突っ込みをしてくる奴だ。気まずくて俺は目を逸らした。まあ、それを聞けたところで、俺にあげられるものなんてないんだけど……。諦めて、許してもらえるまで謝るしかないな。そう思いなおしてライオネルに目を戻すと、彼もまた違うところを見ていた。

「ライオネル？」

「……花」

どこか遠くを見るような彼の目がなんだか寂しげに見えて、名前を呼ぶ。すると彼は俺を見てそう呟いた後、今度は下に視線を落とした。

「え？」

「花が好きだったよ。……白い花。裏の森でも探せば咲いてるんじゃないか」

こちらを見ないまま呟いた彼は、俺の問いに答えてくれたんだというようにやっとなり付く。

花、か。それなら、確かに探せばなんとかかなりそうだ。とても良いことを教えて貰って、俺は目を輝かせつつライオネルの両手を掴ってぶんぶん振った。

「!?」

「サンキュー、ライオネル！」

驚いたように目を白黒させるライオネルに感謝の言葉を述べ、俺は彼の部屋を飛び出した。

その後俺はその足で森に入って、花を探していた。だがすぐに見つかると思ったのはさすがに樂觀しすぎていたらしく、木と草ばかりで花らしきものは見当たらない。それもそのはずだろう。外は寒い。花なんか咲くような気候じゃない気がする。

あまり部屋を空けたら、エドワードはきっとまた心配するだろう。ここ数日、口は聞いてくれないけど、それでもエドワードは俺の傍にいてくれるし、さっきだって俺を探してくれていたんだと思う。彼女は少し過保護すぎると思うけど、でも心配はかけたくない。

急ぎ足で俺は草の間や木の根元にも目を凝らす。……それにしても。

「花、かあ……」

なんだか意外だった。

姉ちゃんや先輩とかでさえ、花より団子な人達だった。花なんて贈ったって、「こんな食べられないもの貰っても」って言われるのが関の山だと思う。けどあのエドワードが花が好きだなんて。

いや、似合わないっていうわけじゃないけど。

彼女を知る度に、不思議に思う。俺を可愛がってくれたり、恋愛小説に興味があったり、花が好きだったり。知れば知る程、彼女は英雄って呼ばれるような人物には見えなくなってくる。勿論、彼女が強いのは知っているんだけど

「……あ」

ふと木々の切れ目が見えて、俺はそんな声を漏らした。少し遠くに川のせせらぎが聞こえる。そこまで歩いていくと崖があって、覗きこむと下は川だった。だけど俺の興味を引いたのは崖でも川でもなく。

その崖の途中に咲く、白い花だった。

「あつた！」

ようやく探しものを見つけて、盛大に独り言を叫ぶ。

だが見つけたはいいものの、手を伸ばしても届きそうにない。けど、目も眩むような高さというわけじゃないし、下は川だ。見た感じ、流れもそう急じゃない。足場もありそうだし、フレンシアの砦を抜け出したことを思えば、あれと大差ない難易度だ。

よし、と気合を入れ直して、慎重に崖を下る。そして、目的の花に手を伸ばしたその瞬間だった。蹄の音が聞こえてきたのは。

もしかして、と思う間もなく、聞き慣れた声が俺の名前を呼ぶ。

「エドワード？」

咄嗟に答えると、蹄の音は止んで。それからすぐに、崖の上から顔を出したエドワードが、群青の瞳で俺を見下ろす。そして、

「何をしているんだ！」

「ゴッ、ごめんなさい！！！」

くわつと凄惨な形相で睨まれて怒鳴りつけられたので、俺は反射的に頭を抱えて謝った。途端、ぐらりと体が大きく傾ぐ。馬鹿、と叫ぶエドワードの声を遠くで聞きながら、俺は谷底の川に吸い込まれたのであった。

「咲良！！！」

一瞬気が遠くなりかけたけど、激しい衝撃と水しぶき、そして名を呼ぶ声に目を開ける。

起き上がろうとしたらあちこちに鈍い痛みが走ったけど、それで

も腕も足もちゃんと動いた。川はそれほどの深さもなく流れも穏やかで、俺は川の中に座ったまま、あつという間に崖をおりてこちらに駆けよってくるエドワードに目を向けた。

「咲良、怪我は!？」

濡れるのも構わず俺の傍に膝をついて、エドワードが勢い込んで尋ねてくる。そんな彼女を見て、大丈夫、と答える前に何故か笑ってしまった。だけど怪訝そうな目を向けられて、慌ててそれを引っ込める。心配してくれたのが嬉しかったなんて、恥ずかしくてとても言えない。

「ごめん。大丈夫だよ」

「本当に?」

疑わしげな顔で聞いてくる彼女に、俺は自分の手に視線を落とし、自分の体より先に咄嗟に庇っていた白い花は、どうにか無事だった。いやこれ一本だったわけじゃなく、崖にはまだ他にも咲いているわけで、ちゃんと自分の体を守っていれば打ち身も減ったかもしれないんだけど。でも無意識にそうしてしまったんだ。

だけど、また心配かけてしまって、こんなところまで探しに来させてしまって、花一本だなんて、余計に墓穴を掘った気がする。

心配そうな彼女にそれを差し出しながらも、情けないやら恥ずかしいやらでとても目は合わせられなかった。

「ええと、その……ごめん。怒らせたり、心配かけたりばかりで目を逸らしているの、彼女がどんな顔をしているのかはわからない。ただどなかなか返ってこない返事に恐る恐る顔を上げると、彼女はぽかんとした顔で花を見つめていた。

「……エドワード?」

呼ぶと、彼女はそこで初めて気がついたかのように俺に問いかけてきた。

「私、に?」

それに頷くのは、俺にとってはあまりにも当然のことだったんだけど。エドワードは驚いたように目を見開き、何度も双眸を瞬かせ

る。

「……出ていったのでは、ないのか」

「え？ あ……」

ふと彼女が漏らした言葉に、彼女が心配してたのは俺の安否だけではないことを知ることになった。

もしかしたら、いつも俺を一人にしないのも、少しの用でも、慌てて帰ってくるのも

「私に愛想を尽かして出て行ったのか、それとも元いたところに戻ってしまったのかと思った」

「な、なんで」

とても彼女を直視できなくなつて、その長い髪が川の流りに攫われて揺れているのをぼんやり眺めながら、だけど聞こえてきた言葉はおかしなもので。

愛想を尽かされたのは俺の方だと思っていたのに。

「俺、怒らせてばかりなのに」

うまく言葉にならなくて、だけどそう呻くと、ふと花を持つ手に体温を感じた。

「……私は、怒ったり笑ったり、そんなことずっと忘れていたんだ。黒太子と呼ばれるようになってから、ずっと」

そつと俺の手から花を取り、そして、エドワードは顔を上げて笑った。

その笑顔があんまり眩しくて、あんまり白い花が似合うから。思わず目を細めてしまった。

彼女はいつも黒い軍服を着ていて、凛々しい風貌にそれがとてもよく似合っているだけけれど。こんな風に笑っているのを見ると、黒い軍服より白いドレスの方が似合うんじゃないかって、思う。

黒太子と呼ばれる、戦場で剣を振るう彼女を、俺は見たことがない。

だから、俺は彼女が英雄に見えないなんて思うんだけど。だけど、普通に笑って怒って、普通の女の子のように見える彼女の一面は、

もしかしたら俺しか見てない一面なのかもしれない。

「……もう、黙っていなくならないでくれ。怒ったりしないから」
そんなことを思った瞬間、聞こえてきた声に顔が熱くなった。

大事そうに花を抱きながら、呟いた声は力無くて、笑った顔はなんだか儂くて。……守ってあげたいと、思ってしまったくらい。そんな自分の思いに戸惑いながらも、俺はほぼ反射的に叫んだ。

「い、いいよ。俺、無神経だし、嫌なときは怒ってくれないとわかんないから！……だけど、俺他に行くところないから、その……」
けど、何か気恥かしくて、言葉は尻すぼみになる。言いたかった言葉は、結局川の音に消されそうなくらい小さくなった。

「……帰ってもいい？」

だけどちゃんとそれは届いたようで、泣き笑いのような顔をしたエドワードが、立ちあがって俺に手を差し伸べてくる。

……本当は、それは俺がやらなくちゃいけなかったことであり。守りたいなんて、彼女に言わせれば百年早いのもかもしれないと苦笑しつつ、俺はその手を取って、だけどなるべく頼らないように立ち上がった。

ちなみにその帰り道、エドワードが跨る馬の後ろで振り落とされないよう必死で彼女にしがみつく羽目になった俺は、やっぱり百年以上早かったと痛感していたのであった。

その6

エドワードの部屋は、基本的に人が訪れることはあまりない。来たとしても弟さんくらいで、軍に関することだとか、戦況だとかを伝えたり相談にくる程度だ。……たまに、俺を襲ってくることもあるけれど。

それ以外に他の兵士が来ることは今のところなかったので、ノックの後に彼ではない声で彼ではない名を名乗り上げるのを聞いて、けど驚いたのは俺だけではなかったようだ。いや、ライオネルはノックなんかしないから、その時点で違うことはわかるのだけど。それを聞いたエドワードも、少し怪訝な顔をしていた。

「何だ」

「ライオネル様が、その」

来訪した兵士の口からライオネルの名前が出て、またエドワードの表情が変わった。口を開きかけて、だけど俺にちらりと視線を投げてからそれをやめると、エドワードは席を立てて扉の方へと歩いて行った。多分、入れといいかけて、俺に配慮してやめたんだろう。

やや気まずくて小さくなりながら、部屋の扉を開けるエドワードの背を見守る。……弟さんに何かあったんだろうか。エドワードもきつと同様のことを思ったんだろう、少し心配そうだった。俺は弟さんと仲がいいわけじゃない。っていうかむしろすごい悪いから、彼が心配というよりは、そんなエドワードのことが心配になった。ライオネルには悪いけど。

「ライオネルがどうかしたのか」

扉を開けて問うエドワードの向こうで、兵士が敬礼の後で答えたのは。

「お倒れになりました」

などと言うから、さすがにエドワードじゃなく俺までも焦ったの

だが。

「ただの風邪って。ほんとに貧弱だな、お前」

「う、煩い……！」

俺の揶揄に、反論する声は弱々しい。

本当のところ、俺もこないだ熱出したばかりだから人のことは言えないのだが。この弟さんにはいつも手を焼かされているから、こぞとばかりに仕返ししておく。さすがに酷い病気だったらやめておくけど、言い返してくる元気はあるようだからこれくらい良いだろう。エドワードも心配そうな顔はそのままだが、さっきよりはどこかほっとしたような感がある。

「疲れが出たんだろう。後のことは私がやるから、ゆっくり休め」

「だが……」

「元々私がするべきことだ。気に病むことはないさ」

ぜいぜいと息を切らせる弟さんから彼女の方に目を向けると、彼と話をしていたエドワードも丁度同じようなタイミングでこちらを向いた。

「済まない、咲良。ライが動けない以上、私が軍を統率せねばならん。今までのように君の傍にいてやれない」

「え？ ああ……大丈夫だよ、俺は」

そんな風に言われると情けない。だが実際、敵だらけのこの砦で一人になるのは少し怖いと思っているの、そんな風に言われなくても情けないには変わりないけれど。でもなけなしのプライドでそんな不安を隠して答えると、エドワードは少し微笑んで俺の髪を撫でた。

「なるべく早く戻る」

しかしいくらなんでも、これじゃ初めてお留守番する子供じゃないか。恥ずかしさに何も言えないでいると、突き刺さるような視線を感じた。

「姉さんに……触るな……！」

うん、熱で視覚までやられてるんだろうか。どう見ても触られて

いるのであって、俺は一切触っていないんだが。それとも、俺の髪が彼女の手を触っていると不満でも言いたいのだろうか。その捉え方は一般的ではないと思うが。

納得行かない目で叫ぶライオネルを見てみると、名残惜しそうに頭から手が離れ、では、とエドワードは声を上げた。

「行ってくる。私がない間ライを診てやってくれ、咲良」

しかしとんでもない要求が来て、俺とライオネルの悲鳴が重なった。

「はあ！？」

綺麗に声がハモった後に、互いに険しい顔を見合わせた後、同時にエドワードへと向き直る。

「ま、待ってくれ姉さん。なんで僕がこいつに」

俺が言葉にならない不満に口をぱくぱくさせている間にライオネルがそう叫び、それに便乗してぶんぶんと首を縦に振る。だがエドワードはきよんとしてこちらを見ただけだった。

「なんだ、私じゃないと駄目か？ 寂しいのか？ ライ」

「いつ、いやっ、そうじゃない！！」

「そうか。てつきりお前も添い寝して欲しいのかと思ったぞ」

「そんな訳」

不服そうな割に顔が真っ赤なのは、熱のせいではなければこいつのシスコン度は相当危険レベルだ。だがそんなことを冷静に考えている場合ではないことに、エドワードの言葉の一部分だけを反芻したライオネルの声で思い知る。

「も『？』」

「わあああ！ わかった！ 後は任せろ！ 行ってらっしゃい！！」

ライオネルにいらぬ詮索をされる前に、俺は咄嗟に叫んでいた。あんなことバレたら、今度こそライオネルに殺される。エドワードはそんな俺の声に押されるように踵を返したが、その瞬間、本当に一瞬だけど 彼女がくすつと笑ったのを俺は見逃さなかった。…

…わざとだな。

ばたんと部屋の扉が閉まり、俺は修羅場の空気なまま、ライオネルと二人残される。

「……貴様、まさか姉さんにいかがわしいことを」

「し・て・な・い！　んなこと考えるお前がいかがわしいわ！！」

「ふざけたことを、毎日姉さんの部屋に入り浸っておいて　」
だが激しい咳が、彼の言葉を遮る。

「言わんこつちやない。大人しく寝とけよ」

「貴様の世話にはならん！」

「俺だつてやだよ。でもエドワードに頼まれたし……」

それに、成り行きとはいえ「任せろ」と答えてしまった以上、放り出してエドワードの部屋に戻っているわけにもいかないだろう。それじゃ嘘をついたことになってしまいうし、気まずい。とはいえ、子供でもあるまいし、似たような歳の男の看病なんて積極的にする気になれない。とにかく腰をおろそうと椅子を探して周囲を見回すと、手をつけてない食事が目に入った。

「お前、飯食つてないの？」

「いらん」

「食わなきゃ治らないぞ。あ、薬もあるじゃないか」

「受け付けん」

「子供みたいなこと言うなよ。それとも愛しの姉さんに食わせて貰わなきゃ無理か？」

「　貴様、ふざけたことを！」

だから何故そこで赤くなるんだ、危ない奴だな。だが俺の挑発は功を奏したようで、ライオネルは起き上がると食事に一瞥をくれた。……こんな面倒な奴の看病なんて、エドワードの頼みじゃなきゃさすがに気のいい俺でもお断りだ。

開始三分程度で疲れてしまつて、俺は長いため息を吐いた。

「エドワード、いつ戻ってくるんだろ」

「……訓練と軍議、それから雑務も色々ある。最近は僕だけで追い付かないこともあったからな……戻ってこれればいいが」

俺の独り言に、ライオネルは意外にも答を返し、それから食事
手を伸ばした。そして、かなりのスローペースではあるが、少し
づつ口に運び始める。

「倒れている場合じゃない。姉さんに負担をかけては、僕が
いる意味がない」

まるで自分に言い聞かせるように、ライオネルがぼつりと
呟く。それからだいぶ時間はかかったが、驚いたことに彼は食
事を全て食べると、大人しく薬も飲んだ。よほど姉が心配な
んだろう。

「訓練とか……、軍のことをエドワードがやるの
って、なんか想像できないな……」

この分では俺がすることはとくになさそう
だ。

言ってるそばから訓練でも始まったのか、外から声
が聞こえてくる。それを聞いているだけの俺にとっては、ただの
気だるい昼下がりにだけども、この指揮を執っているのはエド
ワードなのだろうかと思うと、どうしてか落ち着かなか
った。

「……この軍の指揮官はエドワードだ。前は姉
さんが全てやってた」

「うん、知ってるし、エドワードが強いのだ
って見てればわかるよ。それでも……何か、似
合わないというか……」

不思議そうなライオネルに、そんな風
に返す。

似合わないっていうのもおかしい話で、彼女が
ヴァルグランドの英雄って聞いたときは、何の違和感もな
かった。女の子ってこういうことを知らなかつたか
らかもしれないけれど、凜とした表情も風貌も、
そう呼ばれるに相応しいと思っていたのに。

なんでそう思うのか自分でも分からないから、
ライオネルが怪訝な顔をするのも無理はないと思
う。

「信じられないなら、見てくれば
いい」

「いや、いい。……なんか、見たく
ない。やっぱり、似合わないと思う」

花を持って微笑んでいたエドワードが頭
に過ぎった。あの笑顔な

ら、見ていたいと思うんだけど。

「……なら、黙れ。僕は寝る。早く復帰しなければ」
言うなり、ライオネルが毛布を被って目を閉じる。

「だが、そうしたら姉さんがお前のところに帰るっていうのが、釈然とせんが」

刺々しい声を残して寝息が聞こえ、俺は苦笑した。

ほんと、とんでもないシスコンだと思っていただけ。今は、なんとなくライオネルのその気持ちかわかる気がした。

その7

扉の向こうで物音がして、まどろみから引き上げられる。

物音といつても些細なもので、いつもの俺なら絶対にその程度では起きない筈だ。なのにどうしようもなく覚醒してしまった理由に気付いて気恥かしくなりながらも、扉が開くのを見てほっとした。

ほっとしている自分に気付けば、また恥ずかしくなるのだけでも夜明けはまだのようで、黒髪と黒軍服は扉の向こうの暗闇に溶け込んでいく。だけど、部屋の窓から差し込む月明かりが、群青の瞳を照らしていた。

「……おかえり」

何を言っているかわからず、咄嗟にそんな言葉が出てくる。

ライオネルが倒れてから二日、エドワードは俺の前に姿を見せなかった。二日目に入って復活したライオネルが軍務に戻ったので俺も部屋に戻ったけれど、それから彼女はなかなか戻ってこなかったのだ。

「ただいま、咲良」

嬉しそうにそう言って笑うと、エドワードは隅っこでうずくまる俺のところに戻ってすぐ近づき、俺の前でしゃがんだ。

「待っていてくれたのか？」

「……いや、寝てたよ、ちよっと」

「ああ、起こしてしまったのか……、済まない。どうせいなかったのだから、寝室を使えば良いのに」

いないからといって、女の子のベッドを勝手に使えるほど俺は図太くない。けどそんなことを語っても仕方ないので、それより俺は話を変えた。

「忙しかったんだろ？ エドワードこそ、早く休んだ方が」

「ああ……、だがもう少ししたらまた出る。ライが無理していないか様子を見たいし」

確かにあいつはやせ我慢していそうだ。無理に食事をかきこんで、薬を飲んでいた様子を見るに、とにかく動ければ飛び出していきかねない気配を感じた。だから、申し訳なさそうなエドワードに向かって声を上げる。

「……だつたら余計少しでも休んだ方がいいだろ。俺なんかより自分や弟のこと心配しろよ」

乱暴な言い方になってしまったのは、恥ずかしかったからなんだけど。気を悪くしなかつたかと心配になるが、目が合った彼女はそれどころかくすくすと笑っていた。

「……何？」

「いや、なんでも……、あ」

笑われてむっとうしていると、エドワードは笑うのをやめた。でも俺がむっとうしたからやめたのではなく、何かが気になったという感じで、エドワードは立ちあがると窓辺へと歩いていった。そちらを見て、彼女が何を気にしたのかが俺にもわかる。

「少し、しおれてしまったな」

窓辺の一輪ざしには、この前俺が贈ったあの白い花が挿されている。花が好きらしいエドワードは、それをとても大切にしてくれていたのだけれど、いくら世話をしたって切り花だからそう長くは持たない。そんなことは当然エドワードにだって分かっているんだろうけど。

「……そりゃ、いつかは枯れるよ」

「ああ、わかってる」

窓辺で月明かりを受けるエドワードはとても悲しそうで、何故か心臓をぎゅっとうつかまれるような息苦しさを感じた。そんな思いに突き動かされるように、反射的に立ちあがった俺を、悲しそうな顔のままエドワードが見る。

「枯れたら、また取ってくるよ」

「外は危険だと言っているだろう。……いいんだ。それに、これがいいんだ」

子供のようなことを言っつて、エドワードが曖昧に笑う。どういう意味なのかはかりかねて、何て言っつていいのか分からなくなったけれど。代わりに、ふと思いついたことがあった。

「なら、押し花にする？」

「押し花？」

俺の提案をエドワードが反芻する。その様子じゃ知らなそうだな。

「花を保存する方法だよ」

「そんなものがあるのか？」

心底驚いたように目を丸くするエドワードに頷いてみせると、彼女は興味津津といった感じでまた俺の傍まで戻ってきた。

「教えてくれ」

「う、うん。じゃあえっと、とりあえず……何かいらぬ紙、ある？」

俺の問いに、エドワードはぐるっと部屋を見渡すと、やがてふと一点に目を留め、椅子の上に放り出してあった本を持って戻ってきた。

「っつて、それっつて本じゃん。汚れるから、読めなくなるよ」

「いい。もう読まん」

「でも……」

本は大事にと幼稚園で習った俺には抵抗がある。しぶつてみせると、エドワードはちよつと考えるように本を見てからそれを置き、今度は机の方に向かって、上に置いてある書類から数枚抜いて戻ってきた。

「それ、重要書類とかじゃないの？」

「本国からのライオネルの召還命令だ」

「……いいの、それ」

「本人が受け取らないものを私が持つていても仕様がなからう」

苦笑しながらそう言われて、俺も苦笑しながらそれを受け取った。確かにあの超絶シスコンヤローは、拘束して引きずつてでも行かない限り、姉から離れることはなさそうだ。

受け取った紙を持って一輪ざしがおいてある窓辺に行き、花を取り出して長すぎる茎を折る。そして紙の上で綺麗に花卉と葉を広げると、紙を折ってそれを挟む。それから、そんな俺の一連の作業をじっと眺めていたエドワードに、俺は重しになるようなものがないか尋ねた。少し考えたエドワードが持ってきたのは結局さっきの本で、今度は俺も黙ってそれを受け取って花の上に乗せる。

「こうすれば花の水分が抜けて腐らないよ。まあ、適当だから綺麗にできるかはわからないけど。普通は菜とかにするんだ」

「適当という割には、随分手慣れていたな」

それは姉ちゃんが前に夏休みの宿題でやってたのを散々手伝わされたからである。

まあそんなことはどうでもいいので曖昧に笑っていると、エドワードはわくわくした子供のような目で重し代わりの本を いや正 確にはその下の花をだるうが、見つめた。

「……本、面白くなかったの？」

なんとなく聞いてみると、エドワードはこちらを見ないまま、答もなかなかくれなかった。その横顔は少し困っているように見えて、質問を撤回しようか悩み始めた頃によくやくエドワードが口を開く。「恋、とはどういうものなのか、私には解らん」

だが内容は唐突なものだった。聞く限り答には聞こえなかったそのの意味を考えて、ふとその本を恋愛小説と言っていたことを思い出す。

「どういうものって……、今まで誰か好きになったことないのか？」
率直に問うと、エドワードは少し考えるような素振りを見せてから、やはり首を横に振った。

「……わからん。私は戦ばかりしているから、人の感情に麻痺しているのだろう」

「なんだよ、それ」

エドワードが馬鹿なことを言いだすので、俺はつい声を荒げた。だけど、彼女がそんな自虐的なことを言うのは珍しい。というより、

今まで自分のことなんて全然言わなかったから。自分のことを話してくれるのは嫌ではないけど、でも自分のことをそんな風に言うのは、よくないと思う。

そんな俺の感情を読みとったように、エドワードは薄く笑った。

「好意を持っているつもりは相手からそう言われてな。だが何も言い返せなかった。だが話に聞いたり本で読んだりするような恋焦がれるという感情は、そんな淡泊なものではない気がするんだ」

そんな彼女の言葉に、苛立ちはますます募った。……なんだそれ。そんなの、相手の方がおかしいじゃないか。

「どう考えても相手が馬鹿だろ。それこそ忘れるよ、そんな奴のこと」

前に励まして貰った言葉と同じようなことを、今度は俺がエドワードに向けていた。どんなつもりだろうと、そんな相手を傷つけるような言葉ほいほい言うやつろくでもないような感じじゃない。

俺だって、エドワードをよく知ってるわけじゃない。それでも、これだけは言える。

「感情が麻痺してるような人が、笑ったり、花を大事にしたりなんかしない」

エドワードは一度ふっと笑みを消したが、またすぐに笑顔に戻った。

「咲良……、ありがとう」

さつきよりもずっと柔らかい笑顔で礼を言われ、照れて顔を背けようとしたのだが、頬に掛かった手がそれを阻む。誰の手かなんて考えるまでもなく、俺の前にはエドワードしかいないわけで。

「……え？」

「ならば、君が忘れさせてくれ」

戸惑う俺を覗きこんで、間近でエドワードがそんなことを囁いて。

「ッ!?!」

動揺した俺は、咄嗟に離れようとのけぞってバランスを崩し、そのまま後ろに倒れて壁で後頭部を強かに打った拳句、立てかけてあ

つた剣を派手に薙ぎ倒しながらその中に突っ込むことになった。

「咲良!？」

そんな大惨事を見てエドワードが俺の名を叫び、頭を抱える俺の傍に膝をつく。

「済まない、冗談だ。そんなに派手に転ぶとは思わなくて」

だがその言葉は最初こそ済まなそうだったが、後半どんどん震えていく。そしてとうとう、堪え切れなくなったのだろう。最後におもいきり彼女は吹き出した。

「ふっ、あはははははは！」

エドワードは俺をからかってくすくす笑ったり、穏やかに笑ったりすることはよくあるけれど、こんな風に思い切り声を出して笑うところは初めてみた。最初はぼかんとして、でも俺が笑われていることに気付いてちょっとむっとして、だけどそんなものはすぐに消えて。

笑うなよ、って文句を言いながら、最終的にも俺も声を上げて笑っていた。

俺は女顔な上単純馬鹿で、エドワードにからかわれてばかりだけど。それで彼女が楽しんでくれるのなら 笑ってくれるのなら。

女顔で単純馬鹿で良かったなんて思うあたり、俺は本当に単純馬鹿である。

今日も、とくに変わり映えのない一日が終わろうとしている。毎日の習慣である就寝前の素振りをしていたら、珍しくエドワードが話しかけてきた。いや、話かけてくること自体は珍しくないが、素振りの最中で、ということとはあまりない。

「見れば見るほど、咲良の剣は珍しいな。構えも型も私が知っているどれとも全く違うし」

俺の刀に視線を当てながらそう言うエドワードに、俺も改めて自分の刀を見た。なぜ異世界に日本刀があるのかというのは、俺もかねてから不思議だった。けれど異世界といっても、建造物も植物もそれに人間も、俺がいた世界とさほど変わりないところを見ると、エドワードが知らないだけで、この世界にも日本のような国があるのかもしれない。

「実は前から気になっていたんだ。咲良の知っている剣術を私に教えてくれないか？」

俺のすぐ隣まで来て、なぜか恥ずかしそうにエドワードがそんなことを言う。エドワードに頼みごとをされるなんて滅多にないので、俺は二つ返事で応じた。ついでに、女の子がもしもじしながら頼みごとをしてきたなんて経験も俺にはないので余計テンションが上がった。内容的には、もしもじされるようなことじゃないとしてもだ。やっぱり軍人として、見たことない剣術などは気になったりするんだろうな。俺も武道家の端くれとして気になる気持ちはわかるので、エドワードに刀を渡すと、彼女は嬉々としてそれを構えた。

「こうか？」

持ち方も構えもいきなり様になっているので驚いた。見るだけで同じことができてしまうような天才タイプだな。

「うん。あとはもう少しこんな感じで」

ほとんど申し分なかったが、ここまで優秀だと完璧を求めたくな

る。それでつい、俺は後輩に教えてる気分です。エドワードの手に触れてしまった。だが、ふと彼女の視線を感じて我に返れば、その距離の近さに硬直してしまう。

唐突に部屋の扉が開いたのは、丁度そんな瞬間だった。

「エド」

エドワードを呼びかけた声が、途中で消える。間髪入れずに爆発するどす黒い殺気に俺は咄嗟に手を離れた。もう遅いのはわかっている。

振り向くと、ライオネルが凄まじい形相でこちらを睨んでいた。

……こいつは、なんでこうタイミングが悪いのか。

「くッ、ついに正体を現したなこのま男が！ 姉さんから離れるおッうごぶッ!？」

全くの誤解、とんでもない勘違いで、ライオネルが懐から出した短剣を振りかぶり、俺めがけて突っ込んでくる。だが俺がそれをどうこうする前に、エドワードが俺の刀でライオネルの足を払っていた。

足元を掬われて勢い良く転がっていくライオネルを見ていると、自業自得とはいえないんだか少し哀れだった。

「ノックをしろ、姉と呼ぶな。何度言えばわかるんだ」

ため息と共に吐き出しながら、エドワードが俺に刀を返してくれ。それを受け取った頃には、よろめきながらもライオネルは立ち上がっていた。

「用件は？」

まだ何か言いたげに俺を睨むライオネルを、エドワードがそんな言葉で黙らせる。彼は不満気に顔を歪めたが、ししぶと問いに答えた。

「……ノザ砦の守備に当たっていた小隊からの連絡が途絶えた。交戦の報せはないからフレンチアの線は薄いけど、どうする？」

ふっとエドワードが真顔に戻る。元々ふざけていた訳ではないが、彼女を包む空気のようなものがふっと変わった。

「北か。確かに妙だな。フレンシアならまずヴェザを突破しないとあそこを攻めるのは難しいだろう」

「ああ、だから対応に迷っている。様子を見にいかせようかと思うが、“帰らずの地”からの連絡が途絶えたとあれば、皆行きたくないだろうな」

「そんな迷信を」

ふつとエドワードが鼻で笑い、そう口にして、途中で止めた。そんなエドワードをライオネルが不思議そうに見て、会話が止まる。

「……帰らずの地って？」

沈黙が続いたのでなんとなく聞いてみると、ライオネルがまた険しい顔で俺を睨んだ。

「北には冥界だか異界だかへ続く道があると言われる。ノザは大陸最北の地だから、よく人が消えるだの、帰らずの地だの言われるんだ。いつそお前がノザで消えてしまえばいいのにな」

丁寧に答えてくれたのは、最後のが言いたかっただけか。半眼で半笑いしつつ、だが俺は唐突にはっとした。

異界だって？

「ただの迷信だ。視察隊を編成しろ。誰も行かねば私が行く」

「……それくらいなら僕が行くが、それを聞けばどいつも喜んで志願するだろうな。わかった、早速向かわせる」

答えて、ライオネルは退室していった。俺を睨みながら。けど俺にはもうそれに構っている暇はなかった。

「エドワード、俺、そこ行ってみたい」

「……言つと思つた」

「えっ？」

ぼそりとエドワードが呟く。よく聞こえなかったので聞き返すと、エドワードは何も答えずに俺を見た。その深い青の瞳が少し悲しげに見えて、どきりとする。

「いや。……そうだな。異界を迷信と言えば、君の存在を否定することになるか」

俺の頭に優しく手をおいて、エドワードがそんなことを言う。俺も、冥界だの異界だの、そんなよくわかんないものは信じていなかったから、エドワードが迷信だと言う気持ちは解る。けど実際違う世界に来てしまって、頭の中で変な声がある今となっては、不本意でも迷信と切り捨てるのは難しいというものだ。

異界に近いと言われる北の地。その異界が俺の世界かどうかはわからないけど、ここでじっとしているよりは、帰り道に近づける気がした。

でも何故だろう。嬉しい情報を得た筈なのに、ちっとも胸がはずまない。

それどころか、頭の上のエドワードの手を、子供扱にするなど振り払う気力すらない。

どこか悲しげなエドワードの目を直視することもできなかつたけど、外した視線の先のエドワードの顔色が悪い気がして、俺は喉の奥に引つ込んだ声を引き摺り出した。

「……エドワード？ 顔色悪いよ。疲れてるんじゃないか？」

「いや……、ああ、そうだな。そうかもしれない」

一度は否定したものの、エドワードは俺の頭に置いていた手を自分の顔に当て、力無い声を出した。つい先日まで、倒れたライオネルの代わりにエドワードが奔走していたのだ。疲れていておかしくないと思う。

「忙しいのに我儘言うてごめん。休んだ方がいいよ」

ただでさえ、エドワードは俺に気を回しっぱなしだ。それなのに自分のことばかり考えていたのが恥ずかしくなった。

いつもなら、そんなことはないって突っぱねるのに、そうすると答えていやに素直に寝室に向かうエドワードは、やっぱり元気がないように見える。のろのろと奥の部屋へ引つ込んでいくエドワードを見てみると心配になってきて、思わず俺はその後を追った。

「熱とかない？ 俺もライオネルも倒れたばかりだし、感染ったかも……」

「そうかもな。なんだか寒気がしてきた」

「ええ？ 大丈夫」

「一緒に寝てくれれば温かいんだがな」

予想外の返しに、俺はひきつった声を上げてしまった。それを聞いたエドワードが、くすつと笑い声を漏らす。

「か、からかうなよ？ 俺本気で心配してんだから」

「からかっていないさ」

嘘だ、と言おうとしたが、見上げたエドワードの顔は全然笑っていないかった。ランプの灯りが頼りないせいか、彼女の表情まで弱々しく見える。俺が何か言う前に、彼女はついと顔を背けて、ベッドに入ると毛布を被った。

取り残された俺はどうしていいか分からずにただ立ちすくむ。

もし、その帰らずの地に、俺の世界へと続く道があったなら。当然だけど、俺はここからいなくなる。

突然、一人の夜が寂しいって言ってたエドワードの声が蘇った。……俺は、戦争なんてできないし、そんなことに関わりたくないし、元の世界に帰りたかって思ってる。けどそうしたら、エドワードには会えなくなる。まだ、助けてもらった恩返しも、何一つできていないのに。

俺にできることなんて、未だに何も思いつかないけど。もし、一人が寂しいって言うエドワードの言葉が本当なら。俺をからかっていないってというのが本当なら。ここにいるだけで、俺は少しでもエドワードに何か返せているのだろうか。

ためらいながらもそっとベッドに近づくと、毛布が小刻みに震えて見えた。

「……寒いのか？」

返事はなかったけど、俺は覚悟を決めてベッドに上った。

もちろん、断じて、やましいことなんか考えていない。

彼女に背を向けて、落ちそうなほど端っこにしがみつく。いや、これじゃ寒さ対策にはならないから意味はない。かといって、これ

以上は限界だ。と、俺が葛藤を続けていると、急にふわりと毛布が
かかり、背中に温かな体温を感じた。

「……ッ」

「温かい」

危うく転がり落ちそうになるのを、すんでのところで堪える。け
ど次の瞬間にはどうして堪えたのかと後悔した。素直に落ちておけ
ば良かった。こんなところをライオネルに見られたら、確実に命が
ない。

「……前はよくこうして、ライと一緒に寝たな」

今しがた浮かべた名前を、エドワードが口にする。っていやまで、
それ一体幾つまでやってたんだあいつ？

「咲良も、こんな風に家族と寝ていたか？」

「いやまあ……そりゃ物凄く小さな頃はそうだったろうけど……」

「……そうか。なら、家族のところに戻らなければな」

ぎゅ、と服を掴まれたのがわかった。とにかく、女の子とひとつ
のベッドで寝ているという非常事態を忘れ去る為にも、俺は思考す
ることに没頭する。そうすると、なんとなく分かったことがあった。

「エドワードは、家族が好きなんだな」

「ああ。母上と兄上はいなくなってしまうけれど……いつも私達
のことを一番に考えていてくれた。父上は厳しいけれど本当は優し
い人で……、妹はしっかり者だけど甘えん坊で、弟は私がいないと
駄目な癖に意地っ張りだ」

エドワードの家族について俺はライオネル以外知らないけれど、
少なくとも弟はその通りだな。でも、彼女が自分のことを話してく
れたのは初めてだった。それがなんだか少し……嬉しい。

「咲良の家族は？」

「え？ 俺は……普通だよ。父さんは仕事で今は一緒に住んでない
けど、母さんと姉ちゃん……。うーん、別に家族について改めて
考えたことないから、うまく言えないけど……、今にして思えば幸
せだったんだなって思うよ」

向こうの世界で俺がいなくなったりしたら、母さんは心配するだろうな。姉ちゃんも心配かけてって、怒るだろう。そう考えたら、やっぱり早く帰らなきゃって思う。だけど。

だけど。

「咲良。夜が明けたら、北へ行ってみよう。君が帰れる手がかりがあるかもしれない」

「だけど、エドワードがそう言うてくれても、俺には返事ができなかった。」

「帰りたいとは思わぬ。」

でも、なんとなくわかってしまったんだ。エドワードは本当は、家族と一緒に穏やかな時を過ごしたいんじゃないかって。それを押し殺して戦っているんじゃないかって。

「……やっぱりいいよ。俺もそれ、迷信だと思っし」「え、とエドワードが小さく呟く。」

背中を掴む手が、それと合わせて小さく震えた。

「帰りたいのは嘘じゃない。でも、もし、もしも、自惚れかもしれないけど、もしも。俺がいることで、少しでもエドワードの寂しさが拭えるなら。」

もう少しだけ、ここにいたい。そう思っつのも嘘じゃない。

「だから、もうしばらくここにいさせて」

「咲良……」

俺の名を呼ぶ声が、どこかほっとして聞こえるのは、自意識過剰というやつだろうか。

でも、そのあと彼女が小さくありがとぅと呟いたのは、空耳ではない。と思う。

翌朝、件の砦から連絡があったとライオネルが伝えにきた……らしい。

昨夜一睡もできなかった俺は部屋の隅っこで爆睡していて、それを知ったのは昼過ぎのことだった。

第一話 白い花と黒い服（前書き）

エドワード過去編。話は本編よりもシリアス・暗めです。全年齢の範囲内だと思われませんが、もしかしたら際どい表現があるかもしれないので、一切受け付けないという方はご注意下さい。三人称です。

第一話 白い花と黒い服

「良かった、綺麗に咲いて」

空になるまで水差しを傾けて、独り言を呟く。水滴が煌く白い花弁を映しこみ、少女は嬉しそうに群青の瞳を細めた。そして大きく息をつく。

今日はよく晴れている。

屋外で体を動かしていると暑いほどで、額には汗が滲んでいた。黒い前髪がべたりとはりついて気持ちが悪い。水差しを置いて手で乱暴に顔の汗をこすり、それからふと気がついて両手を見る。

土いじりをしていたので、両手には泥がついていた。

「……やつちやつた」

近くに鏡はないが、今自分の顔がどうなっているかは容易に想像できる。小さく息をついて、少女は水差しを拾うと歩き出した。

「エレオノーラ様！」

だが呼びとめられて、少女は足を止めた。気がつかない振りをするようかとも考えたが、ここまで大きな声で名前を呼ばれて気がつかない人もいないだろう。仕方なく振り向くと、見知った顔の女官が、まあと眉を顰めた。想像していた通りの展開ではあるが。

「なんとというお顔を」

「言わないで。今洗おうとしていたの」

「一体何をなさっていたのですか」

聞くまでもないだろうに。女官の声に咎めるような色がある時点で、何をしていたかなど分かっているに違いない。だが一応、少女 エレオノーラは持っていた水差しをさらに目に留まるように持ちあげて見せた。

「花の世話」

「そのようなこと、エレオノーラ様がなさらなくても。ああ、お召し物も汚れて」

「あら本当。また怒られてしまっわ。だからドレスって面倒なのよ」
片手でスカートをつまんで嘆くエレオノーラの手から、女官が水差しを取り上げる。

「……母上が大事にしていた花だから、私が世話をしたいの」

取り返そうとした手が女官が身を引いたことで空を掻き、エレオノーラがむつと眉根を寄せる。

「とにかくお召変えを」

「……わかったわ。でも少し摘んでいきたいから待つて」

「エレオノーラ様」

「兄上にお見せするの。もう汚さないから」

止めようと立ちほだかる女官をひらりとかわし、エレオノーラは軽やかに走りだした。

エレオノーラが花を持って兄の部屋を訪れることができたのは、たっぷり一刻が過ぎてからだ。着替えと小言の間に花がしおれるかと本気で危惧したが、どうにかそれは免れることができた。

「見て、エドワード兄上。綺麗に咲いたでしょう」

「……朝と服が違うな、エル」

だが兄から返ってきたのは花の感想ではなかった。

「朝は白かった」

目を細めて花弁に触れながら、その言葉が花ではなく服を示していることに、気付くのが少し遅れる。

「また汚してしまったのだろう？」

「……ご明察恐れ入ります」

「それを選んだのは汚さないようにか？」

「兄上には敵いません」

「黒もよく似合う」

兄がそう言うのと、妹は珍しく照れたように頬を染めてはにかんだ。

そうしていれば可愛らしいのという言葉は飲み込んで、兄エドワードは、ベッドに腰掛けたまま手を伸ばして妹の長い黒髪を梳くように撫でた。その、濡れたように艶のある髪といい、色白ではあるが健康的な赤みの差す表情といい。美女の要件を兼ね備えているに関わらず、多少じゃじゃ馬の気があるこの妹は、その表情も男性のように凛々しかった。少女のしおらしさよりも、少年のような荒削りの逞しさがある。髪を梳く自分の手が病的な白さと細さなのとは正反対で、面差しは良く似ているのに全く似ていないと、そんなことを思っただけでエドワードは目を細めた。

そんなエドワードの様子を、エレオノーラが怪訝な表情で見上げる。

「兄上？」

「……いや。花をありがとう。活けるものを」

立ち上がりかけて、だがエドワードの体はすぐにベッドに引き戻されることになった。体を折って激しく咳き込む兄に、慌ててエレオノーラが花を置く。

「兄上！？」

「……だい、じょうぶ……」

荒い息の合間に零れた言葉は、酷く説得力がないと自覚してエドワードは苦笑した。だが口元を拭いてそれを納め、妹へと向き直る。「済まない、エル。そろそろ稽古の時間だ。行かなければ」

「無理だわ、そんな体で。私、今日のご容赦下さるよう父上に頼んで」

「大丈夫だ」

踵を返す妹の腕を掴み、さっきよりも強く、有無を言わせぬような声色でエドワードは今にも飛び出して行きそうな妹を止めた。

強い声と、強い瞳に、エレオノーラは仕方なく足を止める。

エドワードは小さく笑った後に剣を取って退室してしまい、エレオノーラは花を活けてから、主のいなくなった部屋を出た。

第二話 王家の定め

その日はずっと、エレオノーラは気が晴れなかった。

汚れが目立たないのは良いのだが、暗い色というのは気分まで暗くするようだ。エレオノーラはドレスのスカートに目を落とすと、小さく嘆息した。

「ねえさん、続きはまだ？」

そのスカートを引かれて、はっとする。弟のねだるような目を見て、エレオノーラは慌ててその髪をくしゃりと撫でた。

「ああ、ごめんなさいね、ライ」

本を読み聞かせている途中でぼんやりしてしまったようだ。不満げな弟に詫びると、エレオノーラは本を持ちなおした。だがそんな姉を見て、弟はふと眉間の皺を解く。

「疲れてるの？」

「ううん、そうじゃないわ」

もう一度髪を撫でてから本に目を落とし　だが、全く文字が目に入らずに、エレオノーラは本を閉じた。幼い弟は心配そうにこちらを見上げてきて、その不安を拭うように笑いかける。本を読むのは諦めて、エレオノーラは違う話題を探した。

「……ねえ、ライオネル。ちゃんと勉強はしている？」

「なんで急に勉強の話するのさ」

「ほら、その言葉使い。また父上に怒られるわよ」

二つ違いの弟は、未だにやんちゃで子どもっぽい。末妹のイザベラの方がしっかりしているくらいだ。だからエレオノーラにとってライオネルは凄く歳が離れているように感じてしまう。咎められてむくれる姿を見ていると、その思いはますます強くなる。そんなライオネルは可愛い弟なのだが、ハーシエン家の次男であることを考えると、いつまでも甘やかしてはいずれ辛い思いをするのは彼だ。

「あのね、ライ。私はあなたの元気で可愛いところ凄く好きだけど、だからこそ貴方が父上に叱られるのを見るのは辛いよ。ね？ 私のことは姉さんではなく、姉上と呼ぶのよ」

「……やだ。ねえさんはねえさんだもん……」

「我儘言わないの。……ほら、泣かない。男の子はすぐに泣いちゃダメよ」

ずび、と大きく鼻をすすり、両手で一生懸命に両目をこするライオネルを見て、エレオノーラはその涙を拭うのを手伝った。

「わかったわ。二人だけのときは姉さんでもいいから。その代わりにちゃんと姉さんの言うこと聞くのよ？」

「……うん」

「よし。ライは素直で可愛いわね」

「ホント!？」

そう言つて微笑むと、ライオネルは嬉しそうにぱあつと笑った。

今まで泣いていたのはどこへやら、一転して元気になった弟を見て、エレオノーラが目を細める。

「ええ。そんな風に、元気なライも大好きよ。……まあ男の子だもんね。勉強ばかりしているより、元気に走つてた方がいいわよね」

だが今度は、ライオネルの表情が沈んだ。百面相のようにこころる表情が変わるのは今に始まったことではないのだが、理由が気になつてライオネルの沈んだ顔を覗き込む。

「どうしたの？」

「……でもぼく、戦に行くのは嫌だ」

その言葉に、父がライオネルの剣術を稚拙だと嘆いていたのを思い出す。そして、ハーシエン家の男は腑抜けばかりだと嘆いていたことも。

「馬鹿ね。ライは戦争なんかしなくていいのよ」

弟の小さな肩に手を回し、優しく抱きしめる。

ライオネルが剣を使うのを苦手とするのは、才能の問題もあるかもしれないが、根が優しいからだ。エレオノーラは知っている。傷

つけることを恐れれば剣は鈍る。兄が、よく苦い顔でそう独白していた。

そんな思いを、この小さな弟にまでさせたくない。

「でも、嫌だなんて誰にも言ってはダメよ」

だが、囁くのは警告でなければいけないかった。

ここヴァルグランドでは、隣国フレンシアとの戦争が百年以上も続いている。打倒フレンシアこそがヴァルグランドの悲願であり、ヴァルグランドを統べるハーシエン家の唯一無二の目的だ。その為に血を流すことを喜びとしても、厭ってはいけない。それがこの家に生まれた定めなのである。

しかしそれでも、エレオノーラは弟を戦わせたくはなかった。弟が戦を嫌っているなら、その方が嬉しかった。そして、同じくらいに兄にも戦って欲しくなかった。

表ざたにはされていないが、エドワードの体は病魔に蝕まれていた。訓練や剣の稽古など病の身には過酷だろうし、寿命を縮めかねない。ずっと気が晴れないのもその所為だった。ひどい咳をしながらも、剣を持って立ちあがる姿が頭から離れず、胸が苦しい。

「……あ。そうだわ」

だが唐突に、エレオノーラはそんな声を漏らしていた。

「嫌だ。どうして今まで気付かなかったのかしら」

ライオネルから手を離し、両手で両頬を押さえる。

とても素晴らしいことを考え付いたのだ。今まで思いつかなかったのが不思議で、それが悔やまれるくらい、素晴らしいことを。

「……ねえさん？」

「ライ、ごめんね。用事ができちゃった。続きはまた後で」

怪訝そうに呼びかける弟に構わず、エレオノーラは立ち上がると部屋の扉に手をかけた。だがその途端、扉は押してもないのに突然開いた。

「ねえさん！」

もろにバランスを崩したエレオノーラを見て、ライオネルが顔色

を変えて立ち上がる。だが、彼が危惧するような事態は起こらなかった。ぐらりと傾いた体が受け止められたとき、来訪者の存在とそれが誰であるのかを知る。

「ノックもしないで済まない。早く会いたくて　大丈夫か？」

「レインハルト。戻っていたのですか」

体を起そうとするが、やんわりと腕の中に引き戻される。それにさりげなく抵抗を示しながら、エレオノーラは幼馴染の青年を見上げた。

「ああ、ついさっきな」

「ローデルフィールはどうでしたか？」

「王都よりずっと華やかで活気がある。君にも見せたかったよそうだ、渡したいものがあるんだが」

ふとレインハルトの視線が外れ、エレオノーラがその先を追うと、毛を逆立てた猫のようにレインハルトを威嚇しているライオネルと目があった。

「……明日、私がエンズレイに伺います。先ほど戻ってきたばかりなら、疲れているでしょう？　今日は休んだ方がいいわ」

見つめる先で、レインハルトの整った顔が不満そうに歪む。だがすぐにふつと相手を崩すと、レインハルトは手を離れた。

「では、待っているよ」

扉が閉まる音に隠れて、エレオノーラは嘆息した。だが弟の視線が刺さって、そちらを振り向く。

「ぼく、あいつ嫌いだ」

「ライ……、そんなことを言ってはダメ。私はいずれエンズレイに嫁ぐの。レインハルトは私の義弟になるのよ」

「どうして？」

その疑問が、エンズレイに嫁ぐ理由か悪口を言ってはいけない理由の方かを計りかねて、一瞬エレオノーラは口ごもった。だが、恐らく両方に対してだろう。

「レインハルトの兄上が、私の許嫁だから。エンズレイの嫡男と結

婚するのがハーシエン家長女のしきたりだからよ。それと、誰であ
るうと人のことを悪く言っではいけないわ」

「ねえさんはそれでいいの？ 要するに、好きだから結婚するんじ
やないんだろ」

幼い弟の口から出た大人びた質問に、エレオノーラは今度こそ答
えを失う。とはいえ、ライオネルはまだ十歳になったばかりだ。そ
う深い意味のある質問ではないとわかっているのに、戸惑ってしま
う。

「……でも、嫌いじゃないわ。それより、急いであるから。あとでね
早口で言い残すと、今度こそエレオノーラは部屋を後にした。」

第三話 剣と髪飾り

寝苦しさにエドワードが目を覚ますと、太陽は既に一番高い位置を越えていた。

慌ててベッドを降りようとして起き上がるが、それだけの行為が訓練よりも苦行だった。全身に錘でもつけられているように酷く重い体は、自分のものではないようだ。そんな経験は初めてではないが、今日は一等酷かった。

はいずれするようにしてベッドを抜けると、剣を手取る。その重さと言ったら、平常時に人一人を抱える以上に思えた。ひきずりながら部屋を出て、壁に手をつけてホールへと向かう。だが、不意に聞こえてきた音に、エドワードは歩みを止めた。

その音は、剣のぶつかり合う音。

(稽古が……始まっている?)

そんな馬鹿なことがある筈がない。軍の訓練ではなく、今から行われる筈のものは自分の為の個人的な稽古だ。階段を降りるのをやめ、エドワードは体をひきずって、吹き抜けから下の階を覗きこむ。

体が凍った。

そこには自分がいた。

肩までの黒髪を翻して、軽々と体を動かし、戦う自分。まるで、いつもの稽古を客観的に観ている感覚に捉われる。だが、違う。もう自分はあるに活き活きと動くだけの体力がない。そして何より、自分は エドワードは、ここに居るのだ。

「……エレオノーラ……ッ」

その名を囁みしめるように呼び、引きずっていた剣を砕かんばかりに握り締める。

運動した後の心地よい汗を拭い、エレオノーラは自室へと向かっていた。足がもつれそうなほど疲労していたが、その疲れもまた心地よいものだった。昨日くすねておいた兄の服も、ドレスよりずっと動き易くて気に入っていた。

「もっと早くこうすれば良かったんだわ」

疲れも忘れてスキップでもしたい気分だったが、それを思うと悔しくもあつた。もっと早くにこうしていれば、兄の病があそこまで悪化することもなかったらう。

よく兄の稽古を覗いていたので、剣の持ち方も振り方も知っていたし、思ったよりずっと巧く戦えた。褒められることさえあつた。それほど剣術がやりたいわけでもなかったが、褒められれば悪い気はしない。戦は嫌いだ、純粹に剣を振るだけならば楽しいと思つた。うまく隙をついて剣を繰り出す駆け引きは、エレオノーラにとつてゲームやスポーツに近い感覚だ。それらとて、女性である自分には縁のないものであるから余計に楽しい。

部屋に戻ってベッドに飛び込み、そのまま眠ってしまいそうになつて　だが、大事なことを思い出して睡魔に抗い、起き上がる。

レインハルトと約束していたのを思い出した。

面倒だが、すっぱかせば押し掛けてくるのは目に見えている。しぶしぶ着替えようとして、服を脱ぎかけて、だがやめる。　また、良いことを考え付いたのだ。

元通りに服を直すと、エレオノーラはその格好のまま部屋を飛び出した。

今のところ、誰にも気付かれていないのだ。レインハルトだつてこの格好を見れば、きっとエドワードだと思ふに違いない。兄との見分けもつかないのかと言つてやったら、いつも余裕綽々なあの笑顔はどんな風になるだろうか。

楽しい悪戯を思いついた子供のような目を輝かせ、エレオノーラは城を出ると、すぐ傍に居を構えるエンズレイの屋敷へと向かつた。エレオノーラのハーシエン家とエンズレイ家は旧くからの付き合い

だ。親の代からとか、そういうレベルの旧さではない。ヴァルグランドが興ったのと時を同じくして、エンズレイはその長きに渡ってずっとハーシエンに仕えてきた。ハーシエンとエンズレイは、いわばヴァルグランドの光と影なのである。

「これは、エドワード様」

エンズレイの使用人達は、こちらの姿を認めるや否や、各々の作業を中断して敬礼をする。彼らがこちらをエドワードと呼んだことに内心でほくそ笑みながら、エレオノーラは片手で礼を解くよう促した。

「私的な用事だ。レインハルトはいるか」

「は……、しかし……」

「通るぞ」

彼らが言い淀んだ理由は想像できる。恐らく、今日来るのは『エレオノーラ』の方だと聞かされているのだろう。だがそれを理由に『エドワード』の訪問を断ることなど使用人にはできない。彼らの間を悠々と行き過ぎ、エレオノーラはレインハルトの部屋を訪ねた。

「……………」

「久しいな、レインハルト。エレオノーラからの伝言だ。今日は所用で来られぬと」

出迎えたレインハルトに、しゃあしゃあと述べる。それを見て、彼は形の整った眉を寄せた。

「……………なんのつもりだ」

「え」

まさか見破られるとは露も思っていなかったエレオノーラは、彼の言葉の意図を計り損ねた。

「まさかオレをたばかる為だけに、その髪切ったわけではないだろうな」

だがそこまで言われれば、エレオノーラも気付かないわけにはいかなかった。ただの一瞬たりとも、彼を欺くことはできなかったということに。

悔しさに唇を噛むこちらを尻目に、レインハルトが服の中から何かを取り出す。

「……………あ」

綺麗に包まれたそれが、渡したいものであることは想像がついた。恐らくは、ローデルフィールからの土産だろう。だが、レインハルトがその包みをとき、現れたものを見てエレオノーラは思わず声を漏らした。

「何より、オレが君を見分けられぬと思われていたのが心外だ。この礼はいつか必ずするぞ……………エレオノーラ」

氷のように薄く、鋭く、冷たい声と共に、レインハルトが手にしていた髪飾りを握り締め、砕く。

だが謝罪の言葉は、口に貼りついたまま、どうしても表には出なかつた。

第四話 逝く者の願い

陰鬱な気分で、エレオノーラは帰途についていた。先ほどまでの浮かれた気分は、すっかり消え失せてしまった。何人かに、エドワード様、と呼びとめられたが耳に入らず、真つ直ぐ自室に向かつて扉を開ける。

「何処に行っていた、エレオノーラ」

誰もいないと思っていた薄暗い部屋から声があり、エレオノーラはびくりと肩を震わせた。暗がりから現れたエドワードと、鏡合わせのように向き合う。ただし、表情は対照的だった。

「……兄上……？」

いつも穏やかなエドワードのそんな表情を、エレオノーラは見たことがなかった。双眸から吹きこぼれそうな感情は怒り以外に例えられず、だがその理由がわからない。レインハルトを怒らせたことは、たばかろうとした頭があるから仕方ないと思っていた。だが兄に怒られるような謂われはない筈だ。

元はと言えば、調子の悪いエドワードの代わりに剣の稽古を受けようと思ったことがきっかけなのだ。もちろん頼まれたわけではないし、感謝して欲しいわけではないが、怒られることでもないと思う。それなのに。

「自分が何をしてるのか、解っているのか……？」

ぞつとするような声色と共に、エドワードが手を伸ばす。産まれて初めて兄を怖いと思った。咄嗟に避けようとしたがそれは許されず、強い力で肩を押されて、エレオノーラは強かに床で背中を打った。とても病に冒されているとは思えぬ力だった。それに怯んでいる間に、もがく体を押さえられて無理やり服を剥ぎ取られる。

「兄上ッ、やめ」

「すぐに着替えるんだ。異端裁判にかけられたいのか」

だが出かかった悲鳴は、兄の表情を見て消えた。エドワードの手

から力が抜けると同時に、エレオノーラも抵抗しようとした手を止める。

女が戦に出ることも、男装することも、宗教的観点から異端者とみなされる。その末路は、異端裁判にかけられ、大方が火刑に処される。裁判などは名ばかりのものだ。異端は等しく許されない。

「エル……」

母が逝ってからは、もはや彼しか呼ぶ者のない愛称を優しい声で呼ばれ、もう拘束はされていなかったがエレオノーラは動けなかった。覆いかぶさるようにして、エドワードが一度は離れた手を頬へとあてがう。さっきのような力尽くではなく、愛しむように、優しく。

「私はもうすぐ逝く。だがお前には幸せでいて欲しいんだ」

静かな声に、エレオノーラは息を飲んだ。少しずつ、夜の闇が部屋を侵食していく。

頬から髪に手を滑らすと、エドワードは短くなってしまったそれを惜しむように撫でた。

「いいか、二度とこんなことはするな。お前は周囲を気に掛け過ぎだ。自分を顧みること覚えた方がいい……」

もうその頃には、恐怖など消えていた。むしろ、一時でもそんな感情を持った自分を嫌悪すらした。

髪に触れる手に手を重ねる。その体温が、消えてしまつなど信じられないことだった。信じたくもなかった。

「兄上……」

掠れた声で呼ぶと、手から温もりは離れた。エドワードが立ち上がり、エレオノーラも体を起こす。だが、足に力が入らず、立ち上がることはできなかった。

「乱暴なことをして済まぬ。だがお前はこれくらいしないと聞かないだろう」

詫びながら差し込まれた手に、手を伸ばしかけるが掴めない。

「……嫌だ。もう置いていかないで」

母を失ったときの虚脱感に襲われ、伸ばそうとした手を引きよせて、エレオノーラは膝を抱えた。そうして涙を堪える。

誰かを失うのは、もうたくさんだ。なのに、兄は病魔に冒され、父は戦場へ行く。例えば何かの奇跡が起きて、兄の病が治ったとしても、結局は戦場へ行ってしまふのだ。馬鹿げていると思う。それを止められるならば、どんなことでもするの。

せめて、今ある家族を守りたいと思うのに、それすらも許されない。

済まない、小さく紡がれた声を、エレオノーラは聞こえない振りをした。

エレオノーラの長い一日は、まだ終わらなかった。

エドワードが出ていってから、いつの間にか眠ってしまったらしい。だが、ノックの音に目を覚ます。

服を着ないまま寝ていたので慌ててドレスを探すが、すぐに人会同のは無理だ。体裁を整えることを諦め、エレオノーラは扉の外に短く問いかけた。外の暗さと大体の感覚から察するに、もう夜更けだ。身支度など整っていないのが普通だろう。

「誰ですか？」

「フィオラにございます」

侍女の一人の名を聞いて、エレオノーラは益々怪訝な顔をした。

身内ならともかく、ことライオネルは、よく眠れないと夜更けに部屋を訪れてくる、侍女がこんな時間に部屋を訪ねることなどそうはないことだ。

「何？」

「陛下がお呼びです。すぐにエレオノーラ様をお連れするようにと」
どきりと、心臓が大きく脈打った。さっと顔から血の気が引いて、体全体が冷えて行くのが自分でもよくわかる。

父に呼ばれることなど、稀にもないことだ。それでも、それが今日でないのなら、何の用事かと思っただけだろう。だが、今日という日がエレオノーラにとってはまずかった。

もしかして、今日一日、エドワードに成り代わっていたことが父に知られてしまったのかもしれない。

父がそれを知る機会がいつあったのかは不明だ。だが、厳格な父は娘だからと特別扱いするような人間ではない。容赦なく異端裁判に突きだすことくらいはするかもしれない。誰かに指摘されるよりは、自ら汚点を切る方がデメリットは少ないと父なら考えるだろう。

「エレオノーラ様？」

返事をしなかったためだろう。今一度名を呼ばれ、我に返る。

「今、行くわ。ごめんなさい、支度を手伝って貰える？」

兄の服をベッドの下におしやって、エレオノーラは震えを押し殺してそう返事をした。

第五話 王の画策

フィオラに手伝ってもらって身支度を整え、エレオノーラは一人で父の私室へと向かっていた。

肩で切ってしまった髪はどうか結いあげてもらい、簡単にだが化粧も施してもらった。そうしてドレスを着れば、もうエドワードの面影はなくなってしまう。それを何度も確認してから、だが拭えぬ不安と共にエレオノーラは部屋を出た。

父とはいえ国王に会うのであるから、身なりを整えることはおかしくない。だが夜更けの急な呼びつけに、平素ならここまではしなかった。しかしそれを勘繰られることよりも、短くなった髪からエドワードを連想される方が今のエレオノーラには怖かった。

支度到手間取ってしまったので小走りに父の私室へと向かい、騒ぐ胸を落ち着かせながら扉を叩く。

「父上、エレオノーラにございます」

動揺を悟られぬよう毅然とした声で名乗り上げると、入れ、と低い声が返ってきた。父の部屋に入るのは、初めてではない。という程度にしか訪れたことはないが。概ね、記憶と変わったようなところはなない。城のどの部屋より広く、天井も高く、父王は飾ることに興味がないため、調度品も装飾もほとんどない。目につくのは剣や鎧などの武具ばかりで、王の私室というよりまるで練兵場のような印象を受ける。

「このような時間に、一体どのようなご用で
「問いかけは遮られた。足元で重い音がして、そちらに気を取られたからだ。」

「父上……？」

足元に投げて寄越されたものを見て、父の意図がわからずエレオノーラは戸惑いの声を上げた。

「抜け」

返ってきたのは答えではなく短い命令で、ますますエレオノーラは狼狽する。放られたのは、一振りの剣だった。訳もわからず立ち尽くしているうちに、ぴり、と空気が震えた。実際に震えたのではない。もっと感覚的なものに近い。確かにそこにあるというものではないが、確かに肌を撫でて行くそれは

きつと、殺気と呼ばれるものだ。気付いたときには父は既に剣を抜いていた。

「……ッ!?」

何かの冗談だと思った。相手が父ではないのなら。

反射的に剣を拾っていた。冗談でないのなら、そのまま立っていれば斬られるだけだ。

やはり今日の一件が露見したのだろうか。それで異端裁判にかけられるまでもなく、この場で処分しようというのか。ぐるぐるとぐるを巻いていた思考は、だが剣に触れた瞬間に消えた。それから剣を抜いたのは、何かを考えてのことではない。

死にたくないとか。抗いたいとか。

そんなことも考えていなかった。ただ冷静に、こちらに向かう剣の切っ先に視点を当てる。

それが振り下ろされて、真っ向からそれを止めれば、力で押し負けるのは確実。ならば選択は二つ。受けて捌くか、避けるか。ただし避けるならぎりぎりまで引きつけてからでないと、追隨されてしまう。だが、歴戦の父の剣をうまく捌くことなど至難の業だ。

(だとしたら、道はひとつ)

こちらに向かつてくる剣に対して、まっすぐに剣を構える。振り抜かせて、その隙を狙う。技術のない自分にはそれしかない。だがただ避けるだけなら、臆さず集中すればできぬことはない筈だ。

父が剣を振り上げる。無駄な動きなど一つもないからこそ、その軌道ははつきりと読める。実の娘に対し、一分の迷いも躊躇いもない。だがそれもまた予測していたことだ。

(まだまだ)

恐怖は棄てる。焦燥も棄てる。必要なのは、どこまでも細く研ぎ澄まされた神経と、集中力。

切っ先が視界から消える。自分の脳天に迫るそれが、いつ自分に触れるかは、あとは感覚で推し量るしかない。

「ッ！」

ふと風を感じたその瞬間、右足を軸にして左足のみを引く。髪を結っていた紐が切っ先に触れて、ばさりと髪がおちる。そのうちの数本かが宙を舞う頃には、エレオノーラは手を返していた。剣を振り下ろすのに、こちらもまた躊躇いなどない。研ぎ澄ませた神経に、余分な感情の入る余地などなかった。だから、手が震えたのは剣を振り抜いてから。

「……あ……」

手ごたえはなかった。そして、目の前には既に父の姿すらなかった。

だが首筋に圧力を感じて、呆けたような声を出す。視線だけを滑らせると、父の剣の切っ先が首元に触れていた。体が強張るが、自由はすぐに返ってくる。

「……やはり、昼間のあれは、お前か」

「見て……おられたのですか」

父が剣をおさめるのを見て、エレオノーラは深く息を吐き出しながら思わず首筋に触れていた。切られたのではないかと思うほどの威圧だったが、手には血の一滴すらもつかなかった。

「私は、異端裁判行きですか」

「それにはあまりに惜しい」

覚悟と共に問うた声に、返ってきたのは思わぬ言葉だった。

「エレオノーラ。剣を手にしたのは、今日が初めてだな？」

「はい……」

確認に近い問いかけに困惑したまま頷く。しばらく返事はなく、エレオノーラはうなだれていた頭を上げた。そこにあった父の顔にあるのは、いつもの取りつく島もない厳格さでも、冷たさでもなく、

哀しみ。いや、憐れみ。

そのような父の表情を、エレオノーラは未だかつて見たことが無かった。否、一度だけ。

母が死んだ、あの日見せた顔とよく似ていた。

どうして父がそのような顔をするのか理由がわからず、戸惑うばかりの娘の傍まで王は歩み寄る。

「エドワードはもう長くないだろう」

「……………」

「しかしライオネルは未だに剣を取ろうとせん。ハーシエン家の男は腑抜けばかりだ」

「……………」

父の嘆きに、エレオノーラは唇を噛んだ。兄も弟も好きだから、そんな言葉は聞きたくない。だがそれに反抗できぬ程度には、エレオノーラは父のことを嫌えなかつたし、ハーシエン家を憎めなかつた。結果、何も言えないエレオノーラの双肩に父王が両手を置く。

「お前は今日より剣を取れ」

「……父上？」

「私が教える。そして、来るべき日には、お前がエドワードになるのだ」

「仰っている意味が、解りません」

肩が壊れそうなほど、父が両手に力をこめる。だがその痛みもどこか遠いものに思えていた。

そして吐き出した言葉は嘘だった。

エドワードの代わりに戦うことに依存はない。しかしそれはこの国　ひいてはグラン・ルゼリアの宗教観が覆らない限り不可能なことだ。それに、父が言うことはきつと、自分が認めたくないことの向こうにある。

「エドワードはもう長くない。エレオノーラ。エドワードが死ぬ日は、お前が死ぬ日と覚悟しておけ」

それを痛いほどはつきりと突きつけられ、エレオノーラは戦慄し

た。

だがそれに抗う術を、彼女は持たなかったのである。

そして数年後、その運命の日は訪れる。

第六話 生く者の葬儀

すまない、エル。

それが、最後の言葉だった。

安定していた戦況は、フレンシアにリディアーヌという少女が現れたことで一転した。王都を目の前にして、快進撃を続けていたヴァルグランド軍が、弱冠十六歳の少女が率いた兵を相手に大敗を喫したのである。それを機に、状況は一気に逆転した。

奪った領土は次々に取り戻され、今度はヴァルグランドが侵略される側に回ると、国王エドワード七世は自らが出陣した。

そして、数年に及ぶ激しい攻防の末、ついにリディアーヌは捕えられた。そして、救世主としてフレンシアの民に希望を与えた聖少女は、ヴァルグランドの異端裁判にて火刑に処された。その事實はフレンシアに絶望をもたらし、同時にヴァルグランドへの憎しみも募らせた。

一方ヴァルグランドも、リディアーヌとの戦いにこそ勝利したものの、その代償は大きかった。いくつもの砦がリディアーヌによって落とされ、国王は重傷を負って王都へと撤退。なにより目の前であった勝利が消え去ったことに、ヴァルグランドの民は大いに疲弊していた。

その結果、ヴァルグランドの誰もがハーシエン家長子エドワードの出陣に期待を寄せた。

歳は若い、エドワードは軍人として優秀であった。戦の天才と言われた父の剣才とカリスマを余すことなく受け継いだ彼は、怪我によって一線を退いた父に代わり、出陣の準備を進めていた。彼ならこの状況を打開できるとヴァルグランドの民全てが信じた。

しかしそれを嘲笑うかのように、フレンシア王国ノイシス地方で

再びリディアーヌを名乗る少女が現れたのである。そしてまた彼女によって、拮抗していた戦況はフレンシアの優位に転がる。フレンシアでは、復活したリディアーヌを誰もが神聖視し、讃え、そして希望を見た。

そんな折の、ヴァルグランドの劣勢に追い打ちをかけるようなエドワードの病死だった。

このことが公に出れば、ただでさえ疲弊している兵や民は再起できなくなる。そう判断した国王の命により、エドワードの危篤は、ごく限られた腹心と身内のみ告げられた。そして父と兄弟達が見守る中、静かにエドワードは息を引き取ったのである。

「葬儀は略式で執り行う。戦況は逼迫している、すぐに準備をしておけ」

その死を確認するや否や、国王は短い言葉を残して踵を返した。その言葉が誰に向けられていて、何を意味するなのか、エレオノーラには解っていた。しかし声が出なかった。

「あなたと言う人は！」

ようやく絞り出した掠れた返事は、だがライオネルの激昂に掻き消される。

「息子が死んだというのに戦のことですか！ あなたにとっては、僕たちも駒と同じなんだ！」

悪意に満ちたライオネルの叫びに、父王は足を止めた。

「そうだ」

「……ッ」

一分の迷いもなく返ってきた冷たい返事に、ライオネルが拳を振りかぶる。だが、父を打ち据えるはずのその拳は、彼が振りむいたことによつていとも簡単に止まってしまった。

「部下とお前たちの命に差などない。戦場では私を庇って誰かが死のうとも、その屍を踏みつけても剣を振るうというのに、どうして肉親の死にだけ戦を忘れて涙など流せる？」

真つ直ぐにライオネルを射抜く眼光には、言葉どおり涙の一滴もなかった。ただ寒々しく、ただギラギラと滾るようなその目に、ライオネルが一步も動けずにいる間に父王は退室していく。

「……ライ。彼は私達の父ではなく、王なのよ。ハーシエン家に生まれただけで、そのくらいは弁えなさい」

凍りついたように動けない弟を、エレオノーラはやんわりと諭した。それに重なった声は、しかしライオネルのものではなく。

「エドワード兄上が亡くなった今、兄上がハーシエン家の長男なのです。そのような弱気では困りますわ」

目元の涙を拭いながら、イザベラがキツとライオネルを睨む。その台詞を聞いて、エレオノーラは意を決して口を開いた。

「……ライオネル、イザベラ。今から私が言うことをよく聞いて。とても大事なことなの」

イザベラの言は確かに正論でありながら、今の状況には相応しくなかった。

弟と妹の肩をそれぞれの手に抱き、エレオノーラは告げる。あの日、父から告げられたことを。

「病死したのは『エレオノーラ』。今から執り行われるのは、貴方達の『姉』の葬儀です」

弟達にとつて、それは予想もしてない言葉だったのだろう。ぽかんとした四つの瞳に見つめられつつも、エレオノーラは彼らが理解するのを待った。先に、イザベラがはつとしたように視線を落とす。

「そして私は、『エドワード』として出陣します。いいですね、もう姉と呼んではいけません」

「どうしてー！」

ここにきてようやく、ライオネルが悲鳴のような声を上げる。

「何故姉さんが戦に行くんだ！ 兄上が亡くなった今、僕が

「

「では、兄上に戦ができるんですか？」

イザベラが上げた鋭い声に、ライオネルが言葉を詰まらせる。

ハーシエン家次男でありながら剣もろくにあつかえない身である以上、兵を率いる能力も人徳もないことは本人が一番わかっていた。それでも納得できず、ライオネルが唸る。

「しかし……」

「しかしではありません。魔女の一件で民が疲弊していることなど、兄上にもお解りでしょう。今の状況では、家臣も民も兄上の死を受け止めきれませんわ。……そういうことですよ、姉上？」

「……ええ。イザベラ」

まだ幼いのに、イザベラの口調はしつかりしている。だが、瞳は弱い。ライオネルは性格のきついイザベラを苦手としている節があるが、姉の目で見ればイザベラが無理をしているのは一目瞭然だった。それでも甘やかさないのは、もうそれが許されない状況に置かれていることと、これからは傍で守ってやれないから。そして何より、イザベラがそれを許さないと思うから。

「姉上のご英断、妹として誇りに思います」

大人びた口調で贅辞を口にする、イザベラもまた部屋を出て行った。略式とはいえ、喪服へとドレスを着替えるのはそれなりに時間がかかる。そして、エレオノーラもまた、葬儀の傍ら兄が倒れたことで頓挫してしまった出陣の準備も進めねばならなかった。だが、ライオネルはまだ俯いたままだ。

「……ライ」

「ごめん、姉さん」

そして彼が紡いだ言葉も、エドワードと同じ謝罪だった。ぎゅつと胸を掴まれるような思いがして、エレオノーラは弟の頭を抱き寄せた。

「どうして？」

「僕が、臆病だから。だから姉さんに辛い思いをさせる」

「それは違うわ。あなたがいるからやれるの。謝らないで、私は、嬉しいのよ」

兄の身代わりを提示されたとき、逆らう術は持たぬものの、心は迷っていた。兄に代わって戦うことに依存はない。だがそれは、元をただせば兄に少しでも長く生きて欲しいという思いの為だ。死ぬことを前提とした身代わりはつらかった。

それでもエレオノーラから迷いが消えたのは、自分が戦えば、せめてライオネルを戦わせずに済むかもしれないということだ。

自分が戦うことで、また戦況が覆せれば。そして、この戦争を勝利に導けば、もう誰も戦わなくてもいい。

周囲の誰かを死地に見送ることしかできなかった今までより、それはエレオノーラにとってずっと楽なことだった。

「嬉、しい……?」

「忘れないでライ。今日これより、この場所に私は女であることもエレオノーラの名も棄てて行く。だけど、貴方を案じている肉親がいることに代わりはないわ。私がエレオノーラであろうと、エドワードであろうと」

「……………」

「ライの優しいところ、私も兄上も大好きだったわ。だから貴方はそのままです」

抱きしめる手に力を込めて、エレオノーラは最後の姉としての言葉を告げた。

そしてその日、ヴァルグランド女王エレオノーラの葬儀が、しめやかに執り行われた。

第七話 堕ちた英雄

領土を失い、国王が負傷し、そして王子を病で失いながらも、ヴァルグランドを絶望が襲うことは無かった。

エドワードに扮したエレオノーラが初陣を勝利で飾り、勢いづいたヴァルグランド軍は、そのまま一気にフレンシアへと攻め上る。そして第二のリディアーヌが戦場で果てた頃には、ヴァルグランドに黒太子ありと囁かれるようになっていた。

「お帰り、姉さん」

一年ぶりに本国へと戻ると、再会するなり弟はそんな言葉を口にした。既に父王への挨拶は済ませて自室にあり、夕刻も過ぎていたために他に人の姿はなかったが、それでもエレオノーラは眉を潜めた。

「ライ……姉と呼ぶなど、言ってあつたはずだ」

「でも姉さんは、二人のときはそう呼んでいいと言った」

「屁理屈を言うな、それはまた違う話だろう。全く、お前はいつまで経っても子供だ」

だが、髪を撫でようと手を伸ばしてみれば、あることに気付いてエレオノーラはその手を止めた。

「……随分と、背が伸びたな」

「いつまでも子供じゃないさ」

姉の手を取っておろさせ、苦笑するライオネルを見てエレオノーラもまた苦笑した。だがそれもすぐに消す。

「変わりはないか？」

「特には。イザベラも元氣だし、父上の容体も落ち着いている。……ただ」

ふと、ライオネルは言い淀むように言葉を切った。目だけでそれを促すと、視線も外される。

「ただ、なんだ」

仕方なく直接問うと、再びこちらを見たライオネルは、だがやはり言い難そうに口を開いた。

「このところ、よくレインハルトが来る」

「なんだ、そんなことか……、お前、まだレインハルトが嫌いなのか？」

婚約の件はもう白紙だろうつにと言いかけて、しかしエレオノーラは神妙な表情に戻った。

「……そうだな。こうなつては、イザベラがエンズレイに嫁がねばなるまい」

「いや、そういうことじゃない。それに、イザベラは嫁に行きたがつてるようだし姉さんが気に病むことはないと思うが」

「行きたがつている？」

「『戦好きの父上や弱つちい兄上より、エンズレイの殿方は魅力的』と言つていた」

エレオノーラは一瞬きよんとしたが、すぐに可笑しそうに声を上げて笑った。

「はは、遅しいな、イザベラは」

ライオネルは面白くなさそうな顔をしていたが、エレオノーラはひとしきり笑つていた。それから、無造作に防具を外して椅子に腰を下ろす。

「なら、別にレインハルトが来ていても構わないじゃないか。元々、父上はレインハルトを気に入っていたようだし」

「それは　そうだが」

ライオネルは尚も何か言いたそうにしていたが、それ以上何も言えないままにノックの音が会話を中断させる。しかしエレオノーラの短い返事の後現れた人物に、ライオネルは顔をひきつらせた。

「戻つたそうだな、エドワード」

甘いテノールを聞きながら、エレオノーラは葬儀の日を思い出していた。

王家の葬儀とは思えぬほどの、小さく静かな式。その中で、ただ淡々とエドワードとして振るまっている間中、視線を感じていた。その主が誰か、想像がつくからエレオノーラは決してそちらを見なかった。

欺ける自信のない者が、身内以外に一人いた。

「……久しいな、レインハルト」

顔を上げないまま、あくまでエドワードとして答えると、レインハルトはびくりと片眉を跳ねあげた。だがそれよりも気になるのは、嫌悪感を丸出しにする弟の方だ。ライオネルは馬鹿ではないが、我を忘れれば何を言い出すかわからない節はある。

「ライ、お前はもう下がれ」

その自覚はライオネルにとであるのだろう。有無を言わさぬ声で言うと、不満そうにしながらもライオネルは黙って退室した。それを待ちわびていたかのように、レインハルトが口を開く。

「それで、まさかこの期に及んでオレを欺けるとは思っていないまいな？ エレオノーラ」

やはり と。あの葬儀の日から危惧していたことが現実となり、エレオノーラは口を引き結んだ。だが表面上は平静を装う。

「何を言っている？」

しかしその平静も長くは持たなかった。腕を掴まれ、椅子から無理やり引き上げられる。振り払おうとするが、力ではとても対抗できなかった。びくともしないその腕から、それでも何とか逃れようとしながらレインハルトを睨みつける。

「髪が伸びたな、エレオノーラ。やはり長い方がよく似合う」

「だから、違うと」

声は最後まで続かなかった。力尽くで腕を引かれたかと思えば肩を強く押され、バランスを崩した体がベッドの上に落ちる。

「……ッ！」

「これが男の身体なものか」

「やめろ、離せー!!」

「そんな大声を出して人が来たらどうする。この姿を見られてもいいのか？」

口角を引きあげて笑うレインハルトに対し、一切の自由を奪われたエレオノーラにできた抵抗は、ただ目を逸らさず睨みつけることだけだった。

「こんなことをして、ただで済むと思うな」

「案ずるな。陛下には許可を頂いている」

返ってきた言葉に、エレオノーラは今度こそ余裕を失った。そして耳を疑う。

「なんだと……？」

「オレは十数年、兄上からお前を奪うことだけを考えて生きてきた。その絶好のチャンスをおレが逃すとも思つか」

唇が触れそうなほどに顔を近づけられ、エレオノーラは反射的に顔を背けた。だが無理やりに塞がれる。強引で一方的な口付けのあと、己の唇を舐めながら、レインハルトは愉しげに笑った。

「名が売れすぎたな、黒太子。ルゼリアに目を付けられる前に、陛下はお前をおレに委ねてくれるそうだ」

「……ッ」

「つまり、お前はオレのものになったんだよ、エレオノーラ」

「エレオノーラは、死んだ！」

唯一自由になる声を振り絞り、エレオノーラは叫んだ。それはレインハルトに向けたものでもあり、己へと言い聞かせるものでもあった。その名は棄てたものであり、その名で呼ばれることは、決してあつてはならぬことだ。

しかしレインハルトの表情は揺らがなかった。

「そんなことは、オレが認めん。オレはずっと信じなかった。お前が死んだなんてことを、どうして認められる……？」

だが言葉と共に、きらきらと滾るようだったレインハルトの瞳は熱を失った。その途端、エレオノーラは全身から力が抜けて行くのを客観的に感じていた。

押さえつけられていた力がそこから離れても、動けない。

腕から外れた手が、頬を撫でる。それこそ、認めたくない愛おしさを伴って。

「お前はエレオノーラだ。お前が棄て、忘れたというならオレが思いついてやる」

何かを言おうと開きかけた唇は再び塞がれ、頬から滑り落ちた手が身体をなぞる。だけどそれが、やけに遠く感じた。

全てが冗談のようだった。

父の命令も、兄の死も、戦の喧騒も、そして今この瞬間さえも。

全てどうでもいいことだ。どの道、父が決めたのなら逆らうことはできない。その術を、エレオノーラは知らない。

だけどそのまま自分はどこに流されていくのだろう。生きながら葬られ、だが棄てることも許してくれない。なら結局自分は誰なのだろう。

答の出ぬまま、身を委ねる他の道が、エレオノーラには見つけれなかった。

第八話 運命を壊す者

それからすぐに、またリディアーヌを名乗る者が兵を上げ、再びエレオノーラは前線へと戻ることとなった。しかし、エレオノーラは内心そのことにほっとしていた。

決して戦は好きではない。純粹に剣術なら嫌いではないのだが、敵兵とは言えど人を斬ることには慣れなかった。ただ、共に戦う部下を死なせることがそれ以上に耐えられなかっただけだ。全ては国と家のためと、そう割り切って戦ってきた。しかし、その道の行きつく先など考えたことはなかった。だから、父がその先に女性としての幸せを用意しようとしてくれたことは素直に嬉しい。なのに父に会うのもレインハルトに会うのも苦痛で、城には居たくなかった。確かに心のどこかには、恋に焦がれて愛に夢見るような、捨てきれない女性としての感情がある。不器用ながらも、レインハルトが自分を想ってくれるのも解っているし嬉しくもある。だから決して悪い話ではないと思うのに、逢瀬の度に感じるのは、こんなものかという虚しさだった。

その感情の理由はわからないが、結局のところ、血に塗れた手と傷だらけの身体では、もう女としては生きられないのだと思った。ならばいつそのこと、黒太子として戦場で果てられればいい。

密かにそんな思いを抱きつつ、新たなリディアーヌの討伐へと向かったが、死に場所を探しているうちにその戦も一段落ついていた。第三のリディアーヌを打ち破り、あとはその残党を一掃すれば終わる。そこまで漕ぎつけて、まだ生き残っている自分にエレオノーラは絶望を覚えていた。

何をしても虚無感がつきまとい、軍議にも訓練にも身が入らなくなっていた。戦況が落ち着いてくると、次第にそれらのことは弟がするようになり、エレオノーラは部屋に籠ることが多くなっていた。

今回の出陣にはライオネルも同行していた。止めたが勝手についてきたのである。だが強く止めなかったのは、自分自身が傍にいて欲しいと思っていたからだ。何かしら心の支えがなければ立てないまでに追いこまれていた。

それなのに、世間は英雄黒太子などと持て囃すのだから、笑ってしまう。

誰もいない部屋で、エレオノーラは一人、自嘲じみた笑みを零していた。だが扉の開く音がして、その笑みを苦笑に変える。

「ノックしろと言っているのに」

「ああ……ごめん、姉さん」

「姉さんもやめると……、本当にお前は成長しないな。成長したのは背丈だけだ」

「それは済まなかったな」

苛々に任せてつい嫌味を零すと、皮肉めいた謝罪が返ってきた。

それを聞き、自分の八つ当たり気付いてエレオノーラは立ち上がりつつ頂垂れた。

「いや、私の方こそ済まぬ。私がすべきことを、お前に押し付けてしまつて」

「いいんだ。何かしていないと、僕がここにいる意味がない」

「……ヴァスカーには戻らないのか」

苦笑したライオネルに、ふとエレオノーラはそんなことを問いかけた。

ここに来る少し前に、ライオネルは父王からヴァスカー地方の領主を命じられていた。領主を務めるにはライオネルは年若かったが、ヴァスカーは片田舎だ。ハーシエンの名があればどうにかなると、その一言で追いだされたと言ってライオネルは笑っていたが。つまりは、相変わらず剣を取らない次男を見限ったということだろう。しかし勘当ではなく、田舎とはいえ領土を与え、ハーシエンを名乗ることを許しているあたりが父らしいと思った。

「僕がいない方が、部下がうまくやるさ。それより姉さんの役に立

「ちたい」

「こんな血なまぐさいところ、お前には似合わんよ」

「姉さんにも似合わない」

強い言葉で返され、エレオノーラは薄く微笑んだ。本当ならこんな危ない場所に弟を置きたくはないが、無理に帰せるほど今の自分に余裕もなかった。弟に弱いところなどは見せられないが、それでもその存在があるのとないのとは全く違う。

「ありがとう、ライ」

「……………」

謝辞を言うと、照れたように目を背ける弟を見てくすつと笑う。風貌からは残念なほど可愛げが消え去ったが、そういう顔は幼いころと変わらない。

「さて……、そろそろノイシスを片付けておかないとな」

だがそんな微笑みは封じて、黒太子としての表情へと戻る。ここは最前線だ、甘えが許されてはいけないだろう。だが、ライオネルの方は照れた表情は消えたものの、どこか子供じみた表情はそのままだった。

「まだ本国から指示は来ていない。戦況はこちらに優位のまま落ちてきているし、ノイシスに残るフレンシア軍とてその数はいない筈だ。急ぐこともないだろう」

言っていることは間違っていないのだが、正論を口にする割に表情は弱い。そんな違和感に、エレオノーラは声を上げかけて、そしてやめた。

「なら、お前に任せる」

そして言おうとしたことと別のことを口にして、立ちあがる。

「どこへ？」

「見回りもかねて、外の風に当たってくるよ。すぐ戻る」

「姉さん」

前を歩きすぎた姉を、ライオネルは咄嗟に呼びとめていた。だが足を止めて振り返る姉を見て、小さく首を振る。

「……いや。気を付けて」

ああ、と短く答えて部屋を出て行く後ろ姿は、やけに小さくてふらりと消えてしまいそうだった。呼びとめたのはそれを危惧してのことだったが、もし姉がもうここに帰ってこないならば、その方がいい。

逃げたいといえは、どれほど無謀でも連れて逃げた。だけど、そのような弱みを彼女は決して見せることはないだろう。

そのことに少しの寂しさを感じながら、ライオネルは窓の外を見上げた。

見事な満月だった。

その夜、その月の下で、運命に翻弄された英雄はそれを壊す者と出会う。

第八話 運命を壊す者（後書き）

過去編はこれにて完結です。ご読了ありがとうございました。なお、日常シリーズや他の番外編などをまだUPする予定ですので、完結扱いには致しません。

むらさめの誓い

雨に煙る帝都は混乱に支配されていた。立ち竦む者、座り込んで呆然とする者、行動は様々だが誰の顔にも生気がない。

そんな中を行き過ぎる男女がいた。

恐怖と絶望に噎ぶ帝都の住人とは違い、彼らの目には光があった。ただし、表情といえば、周囲とそう変わりはなかった。

ふとそれを自覚した少女は、ただ足を前に出すことで心を振り切ろうとしていることにも気付いた。そして恐らく、隣を歩く人物もそうなのだろうと。彼は自分よりずっと早いペースで歩いて行くので、ときどき小走りにならないと追いつけない。それは、今余裕がないのか、元々そんな配慮をするような人物でないのかはわからない。或いは、両方なのだろう。だがそのことを指摘しなかったのは、少女にそんな余裕がないからではなく、ただがむしゃらにでも前に進んでいたい自分の気持ちが合致していたからだと思う。

少女は小さく息を吐くと、すっかり強張ってしまっていた表情を緩めた。

「……あの」

小さく声を上げる。だが返事はなかった。聞こえていないのか無視されたのか定かではないが、もう少し声を大きくして、返事を待たずに少女は先を続ける。

「泣いてもいいですよ？」

「は？」

今度はちゃんと聞こえたのか、それとも無視しきれなかったのか。不可解そうな声をあげて、男は歩みを止めてこちらを見下ろしてくる。端正な顔をしているが、その表情はいつも険しい。だけど、今はそれ以上に、少し悲しい。

「悲しいんでしょう？ だってあんなに姉さん姉さんって言ったのに。もう会えないんですよ」

少女も立ち止まる。

心を抉ると分かっている、あえて「もう会えない」という言葉を選んだのは、自分を諭す為でもあった。

だからそれは自分に向けた言葉だった。言葉にしないと甘えてしまいそうだったから。そして、泣きたいのも自分の方であった。だが、男は小馬鹿にするように口元を歪め、それから視線を外してまた早いペースで歩き出す。

「悲しくなどない」

表情は見えないが、きつぱりとそんな言葉を投げてよこしてくる。

「無理して」

「無理などしてない。……この世で一番大事な人が、唯一友と認めたい男の傍で幸せになるんだ。これ以上に喜ばしいことがあるか？」

「……」
その言葉は筋が通っているし、納得できる。彼の大事な人は自分にとって敵だから全面的に彼と同じだとは言えないが、彼の友は自分にとってもかけがえない人だから、幸せであるならそれが一番望ましいと思える。

これで良いのだとは、思う。

自分の大事な人とも、これで永久の別れになった。だけど、死んでも戦うばかりの過酷な運命からようやく解放され、これで眠れるのだと満ち足りた顔をしていたことを思い出せば、そこにあるのは悲しみだけではないと思う。

だけど、それは納得できても、やはり別れは辛い。

だからやつぱり、無理をしていると思う。

少女はもう一度声をかけようと顔を上げ、だが男の方が先に声を上げていた。

「小娘」

「は、はい。なんですか」

いつの間にかまた彼は立ち止っていて、少女も慌てて歩みを止める。その呼称について不満を言うのも忘れて応えようと、彼は少しだ

け眉間の皺を緩めた。

「僕たちもここで別れよう」

「え……」

思わず動揺してしまう。

共に歩む道でないことは解りきっている。そして、彼もまた自分にとつては敵にしかならない相手だ。その上、怒鳴るし愛想もないし、こちらのことは小娘呼ばわりだ。好意的な面などひとつもない。それでも、今一人になるのはどうしようもなく心細かった。

「……お前はフレンシア王に会うのだろう。僕もヴァルグランドに戻らねばならない。フレンシアに入れば僕は身動きが取れなくなるから、別ルートでこのまま直接ヴァルグランドへ向かう」

なるほどそれは道理だ。

ヴァルグランドに帰る彼が、来た道を使ってフレンシア経由で帰ることにはデメリットしかない。フレンシア王都で別れば、彼一人でフレンシアを出ることは困難だろう。ヴァルグランド人であることがバレてしまえば、それも、彼はヴァルグランドの王子だ。囚われてすめばいいが、悪くすればその場で命がないだろう。

「お前は……一人で大丈夫か」

思わぬ言葉が降ってきたので、少女は考えを中断すると男を見上げた。だが彼はこちらを向いてはおらず、その目はどこか違う方を向いている。

「だ、大丈夫です。来るときだって一人で来たんですから」

慌てて自分も目を逸らし、そのまま彼を追いこして歩き出す。

立ち止まっている暇はないのだ。今は一刻も早く、この状況をフレンシア王に伝えなければならぬ。そして、無為な争いを止めるのだ。それができるのは、現状自分だけだ。慕い、従っていた絶対たる存在が消えた今、自分がすることはそれを嘆くことでなく、それに継ぐことでもなく、遺志を継ぐこと。そう強く自分に言い聞かせる。

「さよなら」

だが歩き出す背に、雨水が弾ける音がする。駆け寄ってくる足音に振りかえる前に、手を掴まれる。

「おい」

酷く無愛想な声に、ただどこかほっとしている自分がいた。その理由はわからぬままに、掴まれた手に強く何かを押しつけられる。

「……これ……」

それが何かを確認して、少女は軽く目を見開いた。凝った金の装飾に青の宝石が嵌まった指輪は、見覚えのあるものだった。

「どうして？ これ、お母さんの形見なんじゃ……」

「聞け、小娘」

戸惑いながら問いかけた言葉は、鋭い声に阻まれる。さつきほんの少し和らいだ表情は、いつも以上に陰しくこちらを睨んでくる。

「姉上がいなくても、僕は必ず僕の力で、ヴァルグランドとフレンシアに平和をもたらしてみせる。そして堂々とハーシエン家の名と共に国境を越えて、それを返してもらいに行く。だから、待っている！」

そう怒鳴りつけられて、少女は目を見張った。

その刹那、たくさんの記憶が脳裏にフラッシュバックした。

目の前で焼かれた故郷。奪われた家族。そんな混乱の中助け出してくれたひと。あの日から、ずっと敵国を憎み、抗い続けることで自分を保っていた。

だがそれらはすっと消えて行き、目の前には、一瞬にして驚くほど見違えてしまった青年だけが残る。

彼は敵国の王族で、ずっと憎み続けてきた筈なのに。今はどこを探してもそんな感情が見つからない。そのことに戸惑いながらも、少女はぎゅっと指輪を握り締めた。

「……その前に、私が返しに行つてあげるわ！ シスコン貧弱男になんて負けないんだから！」

「僕はシスコンじゃない！」

わざと減らず口を叩きつけると、彼は眉を吊り上げてそんなこと

を叫ぶ。これでは先ほどの決め台詞も台無しだ。それがなんだか可笑しくて、少女は零れそうになる笑みを押しとどめた。

「じゃあ、私のこと小娘って呼ぶのもやめてください」

そう言い捨てて、少女は男に背を向ける。そしてそのまま彼女は歩き出した。もう、彼は追い掛けてはこない。呼びとめはしない。気配は少しずつ遠くなっていく。

「なら次に会ったときには、せいぜいいい女になっている」

少し遠くに聞こえた声に首だけで振り向くと、その後ろ姿は思ったよりずっと向こうにあった。なのに、何故が大きく見えた。

「……何よ。少しかっこいいじゃないの」

握り締めた指輪を掲げて、それから少女はまた歩き出した。

そして自分に言い聞かせる。これらの別れは全て、終わりじゃない。始めて、始まりなんだと。

神の王国はもうない。聖少女も英雄もない。だけど、憎しみが剣にも魔法にも勝るなら、その逆の感情だって何より強くなれる筈だ。

そう信じて、少女はやがて走りだした。その顔には涙があったが、同時に晴れやかな笑顔があった。

とこしえの別れ

書面の文字に目を通し終わると、老兵は顔をあげて、ふうと重い息をついた。そしてペンを取り、新しい紙を取り出しかけて、そしてやめる。逡巡の後にペンを置き、そしてもう一度嘆息した。

これで、何度目のやりとりになるだろう。だが、書面の内容は私たちごっこで埒が明かない。これ以上は、「彼」がなんらかの成果を持って帰らない限りどうしようもなかった。

だが時間はそう残されてはいない。

ヴァルグランド第二王子の言を信じるならば、敵も指揮官を欠いている。迂闊に攻めてはこないだろうが、だからといってずっと手をこまねいているだけとは思えない。ルゼリアの支援がない今、攻められれば持ちこたえられないだろう。

「さて、どうしたものかの」

詮無い独り言を零したそのとき、じつと音を立てて蠟燭の炎が揺れた。ふと感じた気配に振り返る。そこには何の姿もなかったが、老兵は口を開いた。

「……これは、お久しぶりです」

傍から見れば独白にしか見えない問いかけに、だが答は間を置かずして返ってくる。

「姿も見せず失礼。それくらいの力は残しておくつもりでしたが、あまりに煩く呼びとめられたもので」

何も無い空間から、微かに少女の声が返ってくる。苦笑交じりのそれに、老兵もまた目元の皺を深くした。

「それは残念ですな。しかし、そうまでしてこの老いぼれに会いに来て頂けるとは、思いもありませんでしたぞ」

体ごと声の方を向き、老兵が声に答える。相変わらずそこには何も見えないのに、老兵には白い髪に赤い瞳の少女が見えるような気がしていた。その、頑なな表情までもが。

「……聞きたいことがありました」

そして、それが崩れるのが。

「貴公はわたしのことをさぞ恨んでいたでしょう。貴公が開きかけていた和平の道を閉ざしたのはわたしです。なのに貴公はわたしの下で戦う道を選んだ。いつ寝首を掻かれるかと思っていたのに……そんな素振りも見せなかつた」

「これは心外ですな。私は誠心誠意あなた様にお仕えしてきたつもりでしたが」

「そんなことは知っています。だから聞きたいのですよ」

焦れたような声は、暗に時間がないことを示していた。それに気付いていたからこそ、老兵はふつと表情を固くすると、片手で顔を覆った。

「……そうですね。そう……最初は、或いは恨んでおつたやも知れませぬ。ですが、あなた様の傍で戦ううち、あなた様のひたむきさに惹かれていたのもまた事実です。王が無血の道を選んだところで、うまく事が運んだという保証はない。この世の中に、正しい答など存在しない。そんな残酷な世界で、あなた様はご自分の信念を貫いた」

「買い被り、ですな。ですが、貴公がそう思ってくれているのなら、悔いなく逝けます」

「 咲良様は、どうされましたかの 」

ともすれば消えそうになる気配を、繋ぎとめるかのように今度は老兵が問いかける。

「魂の本来在るべき場所へと戻りました。……全てが在るべき姿に戻ろうとしています。無為な争いは終わる。血はまた流れるでしょうが、今度こそそれは新たな時代を告げるでしょう。ですが」

そこで声は言い淀んだ。だが、その時間もないことは、声の主が誰よりも知っている。すぐに言葉は継がれた。

「あなたもまた、この世界に在るべき魂ではないのでしょうか」

「やはり、気付いておられましたか」

「でも、あなたは戻れないのですね。わたしの力でどうにかできれば良いと思っただのですが……」

「お気持ちだけ頂いておきます。私はもう、この世界に長くともまりすぎた。おそらく、こちらとの結びつきの方が強くなっているでしょう。それに、あちらに私の帰る場所は最初からないので。よ。老い先短い命は、あなた様の遺志を継ぐことに使わせて頂きたいです」

答える声はなかった。

隙間風が行き過ぎ、消えそうな気配を攫って行ってしまいそうで、老兵は目を伏せた。神経を研ぎ澄ませることで、消えてゆく少女の、それでも今確かにここにある魂を、最後の瞬間まで感じていようとした。だが、消えそうな声は、それでもまだどうにか声として聞こえてくる。

「多くは……聞きません。また、その時間ありません。ですが……あなたはそれで良いのですか。自分の世界でもない場所で、本当のあなたは何を抛り所とするのですか……」

「抛り所など幾つもあります。王をお守りし、この国の剣となり盾となれたことも。あなた様と共に戦ったことも。咲良様と出会えたことも全て、この老いぼれの中で息づいておりますぞ。……しかし、そうですな。あなた様にひとつだけ、頼みがあります」

返事はないが、老兵は答えを知っている。目を開き細めると、彼は立ち上がって足を踏み出した。

「真咲。世界の狭間に置き忘れた名を、どうか、持っていて下され」

手を伸ばすと空気が震えた。

その一瞬に、老兵は伸ばした手の先に微笑む少女の姿を確かに見た。

「わかりました、マサキ。貴方がわたしの影となりこの軍を支えてくれたこと、わたしは忘れません。わたしがこの生涯でぶつかり合えた唯一の人よ。どうか……あなたの心が安らかでありますように」

それきり声は途絶えた。そして、立ちつくす老兵がいくら待てども、その声が再び耳に届くことはなかった。

「……ゆっくりおやすみ、リディアーヌ」

目の奥に焼きつけた笑顔に、老人は慈しみを込めて呟く。

それが、聖少女と崇められ、死して後も剣を振るい続けた、少女の儚い最期だった。

しあわせの日常 前編

聖少女として異世界に呼ばれた、などというとんでも体験をしてから半年が過ぎようとしていた。

思い出すにつけ、夢ではないかと今も思う。そしてそう思う度に不安になるのだ。あれが夢ではないと唯一証明する存在が エドワードが、ちゃんとこの世界にいることを確認したくなる。

あれから、彼女は俺の家で生活している。他に当てなんてあるわけないから必然だったとはいえ、家族にどう切り出したものかと、相当思案したものだ。結局、うまい話なんて思いつく訳がないので、ありのままを話すことになった。

けどそれはもう、一か八かの賭けだった。いや、賭けにすらならない。こんな突拍子もない話、普通は誰だって信じやしない。

とすると、俺の家族はよほど普通じゃないらしい。

母さん曰く、「嘘をつけないように育てたのは私であるから、信じるのは私の義務」だそうだが、それ以前に頭がおかしくなったことを疑わないのか。

まあ実際にエドワードがいる以上、彼女を放りだすこともできないっていうのはあっただろうけれど。異世界云々はともかく、俺が人攫いをするような人間じゃないってことくらいは、家族は信じてくれてると思ってる。

おまけに、エドワードはこちらの言葉を全く理解できなかった。俺が向こうで言葉に困らなかつたのは、リディアーヌの魂を持っていたからだ。と、リディアーヌが言っていた。つまり、こちらの世界となんの関わりもないエドワードにはこちらの言葉はわからないってことだろう。

ただ、不思議なことに、俺だけは彼女が何を言っているのか解った。向こうにいるときは少し感じが違って、全くの日本語に聞こえるわけではないけれど、それでも不思議に何を言っているのか解るのだ。よくわからないけど、俺の魂がリディーアヌであることに変わりはないということなんだろう。

だとすれば、俺は向こうの言葉を話すこともできる筈だ。なのに、どうしてもそれはできなくなった。多分これは、俺が日本語と向こうの言葉を使い分けている意識がないからだと思う。

こっちで家族と話しているから、日本語に意識が向いてしまうんだろう。何も考えなければ喋れるのかもしれないけど、意識して無意識になんてなれない。何度試してみても、エドワードには通じていないみたいだった。

そうして、何語だか分からない言葉を吐くエドワードと、それを真剣に通訳する俺を見れば、家族もとりあえずエドワードを保護するしかなかったんだと思う。

イケメンが来たと喜んでいた姉ちゃんが、女だと知って落胆したという騒ぎが落ち着く頃には、すっかりエドワードは俺の家に馴染んでいた。

全く知らない世界で言葉も通じず不安だろうに、エドワードが不安な顔を見せることはなかった。そしてこの半年で、彼女はすっかり日本語がうまくなっていた。母さんが元幼稚園教諭で、うちに知育玩具が多かったり、母さんの教え方が上手いのも幸いしただろうけど、それにしただって上達が早かった。頭良いんだなって感心したら、「君とちゃんと会話がしたい」と真顔で言われて狼狽えた。……まあそれはともかく。

言葉が通じるようになって、戸籍のこととか、学校のこととか、問題はまだ山ほどある。当面生活はしていけても、病気になったときとか怪我したときとか、不測の事態を考えればこのままでいい訳

はない。一応、母さんとそういうことについても話はしているけど、もう少しエドワードがこっちの生活に慣れて、こっちの国の仕組みとか制度について理解して本人と話し合ってからでもいいだろうということでも落ちついていて。聡明な彼女のことだから、そう遠い先のことではないと思うけれど。

母さんがそう言うのも道理で、明らかに彼女は無理をしていた。そこに不自然さはないけど、何が変かといえば弱音を全く吐かないことが逆に変だった。母さんですら薄々それを感じているのだから、俺には余計いつもの強がりじゃないかって思える。でもそんなエドワードに、俺はかけるべき言葉が見つからなかった。

というより、俺「が」怖かった。

彼女が言葉を覚えたら、「本当は帰りたいたいんじゃないか」って聞いてしまいそう。もしそれに頷かれたら、俺はどうしていいのかわからない。エドワードの強がりのような笑顔を見るたび胸が痛んだ。

俺は、戦いさえなければ、彼女は幸せになれるって思ってた。それがいかに馬鹿で浅はかか、この半年で俺は嫌というほど思い知っていたから。

あれから向こうの世界がどうなったかは俺達に知る由もない。だけど、あれで全部円満解決って思えるほど俺も馬鹿じゃない。今度ハルゼリアとの間で戦争が起こっているかもしれないし、フレンシアとヴァルグランドだって、長年争ってきた相手を急に受け入れられる筈もないだろう。

そんな微妙な均衡の中で、きっとライオネルは戦っている。それを思えば俺だって辛かった。最愛の姉を奪った拳銃、俺が無茶やってひっかきまわした尻拭いを、全部彼に押し付けてきてしまったのだから。

肉親であるエドワードは俺以上に苦しんでいる筈だ。

わかっていて何も言えず、だけど時間だけは穏やかに流れた。

彼女に何ができるかと考えれば、ただ傍にいたことしかできなくて。

学校はさすがにやめられなかったけど、俺はあれから部活をやめて、できるだけ早く家に帰った。そしてできるだけエドワードと一緒にいた。俺が向こうの世界に行ったときには、彼女が傍にいてくれることで心細さから救われていたから。同じことを返すくらいしか俺には思いつかなくて。

だから今日も、授業の終了と同時に、俺は早々に帰途につく。部活に未練はなかったし、友達と放課後ふらふら道草食うこともなくなった。最短コースで家に辿りついた俺は、家の中でも最短コースでエドワードの部屋に向かう。そんな俺を、家族は過保護すぎるとよく笑う。エドワードの気持ちがちよっと分かった気がした。

エドワードの部屋は、元は物置にしてた六畳程度の狭い部屋だ。けど必要な家具は姉ちゃんのチョイスで親が買ってくれて、その後さらに姉ちゃんの絶妙なレイアウトによりドラマにでも出てきそうなくらい可愛い部屋になっている。姉ちゃんは元々そういうのが好きだけど、ザ・女の子の部屋とでも言おうか……、ピンク基調でフリルカーテンなこんな部屋で、エドワードはいいのだろうかと常々思ってはいる。が、不満と言われたところで俺は姉ちゃんには逆らえないので、敢えて聞いてはいないけれど。

そんなエドワードの部屋のドアを開けると、ベッドと一体型になっているピンクのスチールの机の上で、珍しく彼女は居眠りしていた。傷を気にしてか夏でも頑なに肌を出さず、まだ半袖でも差し支えない陽気にそぐわないタートルネックのカットソーに覆われた肩が規則正しく上下している。

起こすのも悪いと思い、そっと回れ右しかけた瞬間に、群青色の

瞳が開いた。

しあわせの日常 後編

目を覚ましたエドワードが、机から顔を上げてこちらを見上げる。

「あ……咲良。お帰り」

そう言っただけで彼女が薄く微笑み、俺は出て行くのをやめて内側からドアを閉めた。

「ただいま。えっと、起こしてごめん」

「いや、いい風が入るからつい転寝してしまった」

彼女の言う通り、開け放した窓から入る風がレースカーテンを巻き上げていた。

季節は秋に入り、残暑もようやく落ち着き始めている。ヴァルグランドは寒かったから、きつとエドワードは暑さに強くないと思う。これからは少しは過ごしやすくなると思うって言ったら、やっぱりちよつとほつとして見えた。

あんまり無理するなよって、言いかけてやめる。そんなこと言ったら返って無理しそうだった。

「……何してたの？」

代わりに他愛もない話を振る。気が利かない俺は他に話題も思いつけない。でもエドワードは微笑んだまま、机の上のノートを見せしてくれた。

「漢字を覚えていたんだ。咲良の名前は、これか？」

そんなことを言いながら、エドワードが「桜」の字を差す。

「あ、いや。それじゃないんだ。俺の字は、当て字で……」

と言いつつ、エドワードが当て字の意味を知っているとも思えないので、シャーペンで握るエドワードの手に俺は自分の手を添えた。そして、自分の名前を書く。

そうしながら、ふと彼女が真つ先に俺の字を覚えようとしてくれたことに気付いて顔が熱くなった。そんな瞬間にエドワードと目が合ってしまったもので、途端に恥ずかしくなった俺は、乱暴に字を

書きあげて急いで手を離れた。明らかに不自然だったけど、エドワードはそれより字の方に興味津津のようで、さっそく漢字辞典を引いている。

「へえ……、綺麗な名前だと思っていたが、意味も綺麗なのだな」「男の名前じゃないけどね。でもエドワードにそう言って貰えると、なんか嬉しいよ」

素直にそう言つと、エドワードがこちらを見て微笑んだ。その笑顔を見ながら、俺は前から気にしていたことをもう一度口にする。

「名前といえば、本当にいいの？ ……エレオノーラじゃなくて俺がついついエドワードと呼んでいたせいで、彼女はすっかりエドワードで定着してしまつた。後から訂正しようとしたのだけど、エドワード自身に止められて、結局そのままだ。」

「いいんだ。なんとというか……恥ずかしいんだ、そうやって呼ばれるの」

でも、レインハルトはそう呼んでたけれど。この期に及んで嫉妬している俺の心を見透かしてかどうかは知らないけれど。彼女はふと手を伸ばすと、俺の胸に触れた。

「その名は、君だけが覚えていてくれ」

そう言つて笑つた、その笑顔は、いつかも見た泣いているような笑顔で。

胸が苦しくなる。

俺はいつになったら、苦しみや悲しさから彼女を守れるような男になれるんだろう。戦いのないこの国では、物理的な強さなんて酷く無意味に思えた。だったらどうやって強くなればいいんだろう。この世界に戻ってきて、ますます答えは遠くに行ってしまった気がする。

だから、その手を引き寄せることしか俺にはできない。でもそれだって、彼女の為じゃなく、本当は自分の為なんじゃないだろうか。

「……咲良？」

「本当は、帰りたい？」

突然抱き締めた俺の真意を探るように、エドワードが俺の名を呼ぶ。そんな彼女に、俺はついに今まで怖くて聞けなかったことを聞いた。聞かないまま道を探るのはもう限界だった。それでも答えが怖くて震えそうになる俺の腕から、彼女は顔を上げてまっすぐに俺の目を見た。

「言った筈だ。君がいる世界がいいと」

儂さの消えた強い瞳で、区切るようにはっきりと、エドワードがそう口にする。

「勘違いしないでくれ、咲良。あのとき、私は君の手を振り払うことだってできた。だけど何度やり直したって私がそうすることはないだろう。例えばライに恨まれても、この世界がどんなに私を拒んだとしても」

じんと、目の奥が熱い。

違う、これじゃ助けられてるのは俺の方じゃないか。

悔しくて死にそうだ。

俺が守ると誓ったのに。もう戦いなんてないのに、命の危険もないのに。それなのに俺はまだ、彼女に守られるのか。

「……ライオネルがあんたを恨むようなことなんて万一にもないだろうけどさ。こんなんじゃ、俺が恨まれるな」

エドワードが口にした名に、俺はあの険しい顔を思い出した。それでそんなことを呟くと、エドワードが不思議そうな声を上げる。

「何故？」

「何故って、元々俺は恨まれてたよ。あいつ姉さんに手を出さなくてしょっちゅう襲ってくるし、弱音を吐こうものなら容赦なく殴ってくるし。会談のときなんて左右二発だよ？ あんときは口の中切りまくって……」

「会談？」

……しまった。

惨めな気分を振り切ろうと、調子に乗って喋りすぎた。けどその失言を悟った頃には、鋭い彼女はもう察してしまっている。

「すまない。それはきつと私の所為だな」

珍しく彼女が頬を染めて俯いて、俺はその数百倍狼狽して裏返った声を上げた。

「ち、違つよ！ あいつが勝手に誤解して……！」

顔が熱い。火が出そうというのはこのことだ。本当に発火するんじゃないかと思いつつ、俺は悲鳴のように叫ぶ。

「誤解？」

「だ、だってあれ、さよならってことだったんだろ？ もう会わないつもりだって言ってたじゃないか」

俯きながら、もごもご呻く俺の頭上に　くす、という笑い声が降ってくる。なんだかそれが酷く懐かしく思えて顔を上げたのだが、エドワードは笑っていなかった。そして、真顔で俺の顔を覗きこむ。「違つよ。それもあつたが、あれは……死ぬ前に、惚れた男との接吻というのはどんなものか知りたかつたんだ」

「あ、え？」

「でも、なんだか頭が真っ白になってしまつて、思い出せないんだ。だから……もう一度教えてくれないか？」

「え……う、え、あ、ええ！？」

すつと伸びた彼女の手が頬に触れた瞬間、まるでそこから強い電流でも流れているように、俺は飛び跳ねて後ずさり、そのままずっと尻餅をつく。だが、そんな俺を見たエドワードが腹を抱えて震えているのを見て、体中の血が顔と頭に集結した。

「か、か、からかつたな！？」

「ぶつ……いや、すまない。君は相変わらず可愛いな」

笑いすぎて苦しそうに、エドワードがそんなことを言ってくる。そんな言葉も、最近では聞かなかつた。だから俺にとっては不名誉な言葉なのに、嫌じゃない。嫌じゃないけど、やるせない。笑つてくれたのはいいけど、俺ってこんな笑わせ方しかできないんだろうか。「そんなに腐るな。別にからかつていない。君がいちいち可愛い反応をするだけだ」

「か、可愛いって……俺は……ッ」
なんだかだんだんイライラしてきた。いや、彼女に苛立ってるわけじゃない。

可愛いなんて言われたら、やっぱり男として見られてないんじゃないかってすごい不安になってしまっじやないか。一緒にいたいって言うてくれても、当たり前のように傍にいてくれても、そんなこと言われたら気持ちが見えなくなってしまう。

男として見てもらえず振られた過去が、俺には相当トラウマだった。でも、あときはそれも仕方ないって思えたけど。

でも、今はそれじゃ嫌だ。

ちゃんと男として見て欲しいし、頼って欲しい。

だけど今の自分では無理だろうってことも解りすぎていて。そんな自分への苛立ちが俺をたきつけて、咄嗟に両手で彼女の両腕を掴んでいた。

「からかってないってことは、さっきの嘘じゃないってことだろ」
驚いたようにこちらを見る彼女を真っ直ぐに見つめ返す。変なところに火がついてしまったらしい。ちよっと後悔したけど、もう今更引けない。

「なら、するよ」

エドワードは目を逸らさなかった。驚いたように見えたのも一瞬のことで、すぐに彼女も真顔に戻る。

「いいよ」

焦るわけでもうるたえる訳でもなく、静かに見つめ返してくる群青の瞳が点いた火を一瞬で消火する。途端にはったりも利かなくなってしまうって、うるたえたのは結局俺の方だった。

「ちよ……、ちよっと待って」

「ああ。待つよ」

「お、俺、本気だからね？」

「……ああ」

笑いを堪えているのがバレバレな返事は、俺をさらに落胆させる。

そして楽しそうな彼女の声が、さらにそれに追い打ちをかける。

「私がしょうか？」

「い、いや！ だめ！」

悲鳴を上げる俺に、ついにエドワードは吹き出した。

なんだかヴアルグランドにいた頃を思い出す。こんな風にエドワードにからかわれて、ライオネルに睨まれて、すぐそこが戦場だなんて忘れそうになるくらいの穏やかな日々。ライオネルはエドワードが俺を構う度気に入らなそうな顔をしていたけれど、エドワードが笑うと、それでもどこか嬉しそうだった。

「……エドワード」

「ん？」

「ライオネルは、あんたが笑っていれば幸せだと思う。俺も同じだから……、俺」

「わかっているよ。けど君はわかっていない」

けどそんな俺の言葉をエドワードが遮る。何のことも分らず怯む俺に、エドワードが焦れたように言葉を継ぐ。

「私だって、君には笑っていて欲しい。私の為に無理しているのは君の方じゃないか」

「あ……」

豆鉄砲を食らった鳩みたいにはかんとする俺を見て、エドワードがふつとため息をつく。

「……やっと思い付いた。」

俺はこの世界に彼女を連れてきてしまったことに、勝手に罪悪感を覚えて、勝手に焦ってたんだ。それが、きつと何より彼女を苦しめていたのにも気付けないで。そんな俺を頼れるわけもなかった彼女に、頼られたくたくて無理してた。

なんて滑稽なんだろう。

気付いた途端、肩の力が抜けた気がした。そしたらなんか急に笑えてきて、ふつと笑い声が零れた。

そんな俺を見て、エドワードも笑った。

あの悲しそうな笑顔じゃなくて。無理して強がった気丈な笑顔でもなくて。

その心底幸せそうな笑顔に触れたくて、腕を掴んでいた手を離す。

「……エレオノーラ」

「……はい」

頬に触れながら、自然に口をついた名前に、エドワードはそんな返事を返すと微笑んだまま目を閉じた。

俺はきつと、この笑顔を守って行こう。ヘタレでも情けなくても、はったりでいいから笑っていよう。エドワードが笑えるように。あいつが安心できるように。

新しい誓いと共に、俺はそつと彼女に顔を近づけた。

だがその先は、夕飯を告げる母さんの声にお約束のように阻まれた。

しあわせの日常 後編(後書き)

番外編のお話は以上で終了です。お付き合い下さってありがとうございました。ございました。宜しければ一言頂けますと嬉しいです。

第一部 第十六話「約束」〜エドワード視点（前書き）

別視点からの本編シリーズです。リクエストを受けた話をリクエストのあった視点で書いております。本編のネタバレ含・恋愛要素濃い目。

第一部 第十六話「約束」〜エドワード視点

妙なことになった。

そう思いつつも、煩わしいというような感情は湧かず、逆にこまごまとした用事で部屋を空けねばならぬことこそ煩わしかった。

気まぐれに馬を走らせた先で、気まぐれに助けた少女は、少女ではなかった上にこの世の人間でもないと言う。何を馬鹿なことをと思いつつ、だが笑い飛ばすことができなかった。

最初に違和感を感じたのは、女と間違えたことを詫びたとき。記憶がないと言っておきながら、『いつものこと』などという言い方をする。だけどボ口を出すような局面ではなかった筈だ。おそらく私が間違えたことを気に病まないよう咄嗟に言ったのだろうから、戸惑った。私を欺こうとしているには、あまりに言っていることがちぐはぐだ。

あれこれ思案していた私は、だんだんと部屋へ向かう足取りが早くなっていることに気付くのが遅れたが、気付いてしまえば苦笑するしかなかった。

まさか、彼は本当に魔女で いや魔「女」ではなくともフレシアからの刺客かなにかで、私は本当に籠絡されているのだろうか。……或いはそうかもしれない。

全てが彼の演技で、いつか私に死をもたらすとしても、それならそれでいいと思えてしまう。その思いは、彼が言葉を紡ぐたびに大きくなる。

私言えず胸に秘めたことを、次々と彼が口にするたび、これが全て嘘でもまやかしてもいいと思えるほど満たされた。

だから怖い。

彼に言われずとも、この世界に生きる者とはまるで違う目をした彼は、

突然ふっと、消えてしまいそうで。

そんな焦燥が、自分を部屋へと急がせていた。だが、開け放った扉の向こうに彼の姿を確認したときに得たのは安堵だけではなく、同時に苦みのようなものも胸を侵食していく。その理由は、彼が手にしていたものにあった。

「何をしているんだ」

私の剣を手を取っていた咲良を見て、思わず咎めるような声を上げてしまう。

「あ、勝手に触ってごめん……」

違う。咎めたのは、私の私物を勝手に触ったからではない。

それを解っていない咲良の手から剣をひったくる。

「そうじゃない。君は剣を持つ必要はないんだ。私が護ると言っただろう」

この剣はルゼリア皇帝から賜ったものだが、正直なところ壊れようが折れようがどうでもいい。異端者である私に名誉などという言葉はあまりに意味がない。

ただ、ルゼリアにも力を認められたということは事実としてある。それなのに、私が全力を賭して守るといつても受け入れてくれない咲良にはときに苛立ちを禁じえなかった。一体何が不満なのかと言外に含んで見下ろせば、咲良は私から目を背けて、空になった手を見つめながら言い難そうに呟いた。

「ええと……なんかそれって物凄くヒモっぽくて悲しいかなって……」

「ヒモ？」

「ええつと……、女の人に依存するヘタレな男？」

「それが何か悪いのか？」

男だ女だなどという概念は、どちらでもない私からすればまた一等無意味なことだ。

少女だと思いこんでいたから驚きはしたが、男であったからといって何か私の中で変わったわけではない。咲良は愛らしい容姿で純な言葉を吐き、今にも消えそうなほど儂くかよわい。なのに、私に

迷惑をかけまいとする様が健気で、保護欲をかきたてる。それで思わず髪を撫でようと手を伸ばしかけたが、彼が口にした言葉によってその手は止まってしまった。

「……でもさ、エドワード。もし戦場に出ることになったら、俺足手まといにしかならないよ。それなのに英雄の右腕なんて、誰も信じないんじゃないかな」

「私は英雄などではない。誰がそんなことを言ったんだ」

とても嫌いな単語に、唐突に現実に戻される。酷く興奮してしまったが、咲良が困っているのを見ていたら、結局放っておくこともできなくなった。

「先日大規模な攻防戦を終えたばかりだ。当分私が前線に出るようなことはないだろう」

「でも……」

「……ああ、そうだな。丸腰というのは確かに不自然か……」

やっと、彼が何を言いたいかが分かった。

私の腹心が丸腰というのは確かに妙だ。いや、そんなことは元からわかってはいた。それでも、私は咲良に剣を持って欲しくなかった。戦いが嫌いだという彼の言葉に安らぎを感じていたかったから、そんなものと彼を結びつけないという、要するに単なる私の我儘だ。

だけど、それでも傍に置くなら我儘を言っている場合ではない。

それに、やっと気付いたのだった。

「ここにあるのは私が賜ったものだから、武器庫から見繕ってこよう」

「あ、いいよ。何でもやってもらってばっかりで悪いし……、自分で見たいし、自分で行く」

「ならば案内する。ついておいで」

自分を納得させるため、それ以上の思考を放棄して部屋を出る。

後ろをついてくる咲良の気配を感じながら、重い足を武器庫へ向ける。

「……エドワードって忙しい人なんじゃないの？」

「そうでもないさ」

ふとそんな声が背中に掛かって、私は自嘲気味に返事をした。

「訓練は部下に一任しているし、指揮はライがとっている。私でなくば駄目なことなどそうはないんだ。……そんな私が英雄だということなら、随分怠惰な英雄もあつたものだろう」

そんな弱気な発言、一体いままで誰にできただろう。私を信じ、付き従い、命を懸ける者たちの為に、私は例え偽りでも英雄でいなければならなかった。だけど、咲良がヴァルグランドの人間でないというならその必要はない。だから、傍にいて欲しいと願ってしまふ。怠惰だけでなく、私は酷く自分勝手だ。

それから咲良は何も言わなかったけれど、そつと振り返ってみると、肩越しに見えた彼の顔はどこか釈然としないようで、こんな弱味を見せてもなお私を英雄たる人物だと思ってくれていることが、今は 嬉しく感じた。

そのうちやがて目的の場所に辿りつき、その扉を押しあける。私自らは滅多に來ない場所だが、冷えたここの空気は嫌いではない。

「……どれもいいの？」

「ああ。好きなものを選ぶといい」

一般的に兵に支給している剣から、行商人に押し付けられたものまで何でも押し込まれているが、それだけに一本くらい滅つたところで誰も気付きはしないだろう。本当は、どんな小さな武器であれ持たせたくないのが本音だが、そういうわけにはいかないと先ほど悟ったばかりであるから、投げやりに言っただけに灯りを手渡す。そして、興味深そうにあれこれ手を取る彼をぼんやり眺めていたら、ふとその姿が闇に沈んだ。同時に、物凄い音が耳をつんざく。

「咲良！？」

その音に驚いて、思わず私は暗闇に踊り出していた。

……そんな迂闊なこと、普段なら絶対にしない。なのにどうしたことだろう。気持ちがあわわわして、まるで酒にでも酔ったように

高ぶる気持ちが冷静な思考を奪う。

「大丈夫、コケただけだよ！ 危ないから」

そんな声を遠くに聞きながら。そして、冷静を欠いた自分を、どこかで心地よく思いながら。ふわりと体が浮く。

こんなに思い切り転んだのは、子供の頃以来だ。思わず笑い出しそうになるがそれを止めたのは、ぐえ、という苦悶の声だった。

「す、済まん。暗くて足元が覚束なかった」

どうやら派手に咲良を押し潰してしまっただらしく、下敷きにしてしまった彼に慌てて詫げる。

石の床よりは柔らかいが、意外に筋肉質な感触に、やはり男なのだと改めて思い知った。裸を見ておいてなんだが、やはり服を着ていると少女にしか見えないのだ。見間違いではなかったかと思ってしまうほど。

だけどその感触も、転がった灯りに照らし出された彼の慌てた顔も、それを否定する。

それにしても慌てすぎだ。十人が見て十人が慌てていると断言するほど、見事に彼は混乱していた。真っ赤になって訳のわからないことを呻いている彼を見て、なんだか新しい感情が生まれてしまった。

可愛い。

これでは、婚約者レインハルトが私のことを可愛げないというのも無理はない。こんなに可愛らしい反応、女であった頃の私でも到底無理だ。

このままもつと近づいてみたら、どんな反応をするだろう。それを確かめてみたい欲求をすんでのところで耐えられたのは、ふと目にした覚えのない剣が視界に入っただけに興味を奪われたからであつた。

「変わった剣だな。片方しか刃がない」

欠陥品だろうか？ こんな剣が武器庫にあるなど知らなかった。

それは本当にただの眩きだったのだが、意外にもそれが咲良の興味

を引いたようで、焦点の定まっていなかった目がその剣一点に注がれている。

「エドワード」

「ん？」

「俺、これがいい。これにする」

そうして私を呼んだ彼は、迷いのない声でそう告げた。

剣は人を選ぶ。誰かがそう言ったのを不意に思い出してしまふほど、その剣は酷く彼の手に馴染んでいた。ぞくりと、肌が粟立つくらいに。

どんなに酷い戦場に出ようと感ずることのなくなっていた恐怖が、今私を襲っていた。人ごとのように、そうか、と答えるので精いっぱいだった。

この剣を振るう咲良が血に塗れるところを想像しそうになってしまつて、慌てて頭を振つてそれを追いだす。

それだけは嫌だ。

主よ、もしもあなたが本当に存在するというなら 戦うことを厭う者が血に塗れるなど、私だけでもう充分ではないか。

声にならぬ呟きとともに、私は咄嗟に剣を掴む咲良の手を握り締めていた。

「咲良。ひとつだけ約束してくれ」

「え？」

既に汚れきつている私は、どのような道が待ち受けようが覚悟している。

だけど、咲良だけは。

間違っていると、自分を押し殺していた私の心を救ってくれた彼だけは、綺麗なままで守り抜きたい。だから私は、この世界ではあまりに難しい約束を彼に強要する。

「……その剣で、誰も傷つけないで。今のままの咲良でいて欲しい」

この世界に在っても彼にその約束を守らせることを、自分に誓いながら。

第一部 第十九話 招かれざる客〜エドワード視点

突然の婚約者の来訪に、私は動揺を隠せないでいた。

婚約者といつても、表沙汰にはなっておらず、私の家と相手の家で秘密裏に約束されただけのことはある。それもその筈で、エドワードとして剣を振るう私が嫁ぐことなど出来るわけがない。だからといって、いくら男だと言い張っても現実に男の体を持たぬ私は、どこぞの姫君を娶るわけにもいかない。対外的にはそうなるだろうが、それではそのどこぞの姫君があまりに憐れだ。

どのみち、長きに渡ってルゼリアを欺くことは、かえってヴァルグランドにとってリスクが高い。だから戦況が落ちついたところで私は自分で自分の始末をつけるつもりだった。

今の私の願いは、戦場で死にたい、ただそれだけだ。そんな私は、最早女性には戻れないのだろう。だからもう決心はついていていた。

筈なのに。

なのに、なぜ今更、こんなに心が揺らぐのだろう。

「元気そうで何よりだ、エレオノーラ」

「……エドワードだ。何度も言わせるな」

「久しぶりに会ったというのに随分な言い草だ」

その名を呼ばれると胸がざわつく。その名と共に棄て去った筈の迷いまでが、一緒に姿を見せそうになっってしまう。

だが何度言っても、レインハルトは決して私をそう呼ぶことをやめない。

例えば私が剣を棄てて女に戻っても、エレオノーラに戻れるわけではないことくらい、レインハルトだって解っているだろうに。

「お前が何度名を変えようが、誰になろうが何をしようが、オレにとってお前がエレオノーラであることは決して変わらん。お前が棄てるなら捨つ。忘れるなら思いださせる。何度でもな」

心を読んだように、レインハルトはそう言っていると、私の髪に手を差

し入れた。

心を読めるなら、どうして受け入れてはくれないのだろうか。そうして寄り添ってくれるなら、せめてその眼差しを受け止めるくらいは私にもできたらう。だが私はその熱のこもった瞳から、逃げるように目を逸らした。

……咲良なら。私のことなど何も知らないけれど、私の考えていることなどにも解らないのだからうけれど、それでもいつも私の心をそつと撫でて癒してくれる。

だから、ただ傍にいただけで、見ているだけで安らげるのに。

思わずそんな風に思ってしまったって、そしてそんな自分に愕然とした。

これでは、まるで

「エレオノーラ」

鋭い声で呼ばれ、心臓が跳ね上がる。それを鎮めるように、私は自分の体を抱いた。……こんな気持ちだけは、読まれる訳にはいかない。静かに息を吐き、心を落ちつける。そうして何事もなかったかのようにレインハルトを見上げると、強張ったように見えた彼の表情は、すぐに解けた。

いつものように微笑んで、私の髪を一束手に取り、口付ける。

貴婦人達なら黄色い悲鳴でも上げるのだろうか、私の口からは何も零れない。けれどその髪を掻き上げられるとまた胸がざわついた。「また、傷が増えたな」

髪で隠れていた首筋の傷を見つけられて、咄嗟にそれを手で覆う。見られて困るものでもないし、見られたくない訳でもない。ただ、傷ついてゆく自分の体を知るのが、穢れていくようで辛かった。

だけどそういう逃げを、レインハルトはいつも許してはくれない。手首を掴まれ、傷を覆っていた手は力尽くで引きはがされる。

「そんなに傷つくのが嫌なら、戦などやめてさっさとオレのものになつてしまえばいい」

首筋に熱い吐息が触れる。何か含んだような視線とぶつかり、だ

がやはり私はそこから目を逸らす。

「……何か用事があって来たのではないのか」

さりげなく身を引いてそう問いかけるが答えはない。彼へと向き直り、無言で促すと、不服そうな目をしながらもレインハルトは口を開いた。

「国王陛下からの伝言だ。早々にノイシスを落として帰還せよとな」
そうして彼が告げた父上からの言伝は、予想と違わぬものだった。指揮を執るライオネルが慎重に行きたいというので任せているが、それにしたって時間をかけ過ぎだとは私も思っていたことだ。

「らしくないな、エレオノーラ。あんな小さな砦を落とすのにどれだけ時間をかける気だ」

「リディアーヌ軍はもう虫の息だ。焦ってこちらから仕掛けて被害を出すより、じわじわといたぶる方が手間も被害もない」

「つくづく恐ろしい女だ、お前は。まあ構わんさ。好きなだけ戦に興じていればいい。お前に傷が増えれば増えるほど、お前を顧みる男はいなくなる。オレにとってはその方が望ましい」

ほぼ言い訳だったが、さらりと返した私に、レインハルトはそんな言葉を投げつけてきた。今更それに傷つくほど私は繊細ではない筈なのに、心のどこかが刺されたように痛むのは何故だろう。

だがふと間近に感じた気配に、思考が奪われる。

「レインハルト」

制止の意味をこめて名を呼ぶが、聞き入れて貰えないのもまた分かっていたことだった。力で勝てない私は、それでもその手から逃れようと後ずさるが、ソファに押し倒された時点でそれすら誘導だったのだと知る。

最後の抵抗に顔を背けても、顎を掴まれて引き戻される。

「今は、やめないか。そんな場合ではないだろう」

「今がそんな場合でないなど笑わせる。ではお前はオレに、半年振りに会った自分の女に何もせず帰れとでも言うのか」

正論だとは、思う。恋人との逢瀬に、こんなに淡々としている自

分の方が少しおかしいのだと。

異端者である私に残された道は、裁きを受けて死罪となるか、軍人として戦場で果てるか、二つに一つしかない。そんな私に、女としての幸せを与えてくれようと言うのだ。それを不満に思うなど……どうかしている。

抵抗を諦めた私を見てレインハルトが満足げに笑い、それを最後に私は何を見るのも放棄して目を伏せた。

でも、それが間違いだった。

目を伏せたら浮かんでしまう。無邪気な笑顔が。拗ねたように怒った横顔が。気持ち良さそうな寝顔が。それは全て、同じ人のものであった。

「あ………」

衣服がほどかれて、はっとした。すぐ隣の部屋はライと……咲良がいる。あの馬鹿弟は、いくら言っても入るときにノックをしないのだ。

「……待ってくれ。せめて、寝室で………」

「待てん」

再び抵抗を試みる私に、レインハルトは気分を害したように短く答えた。

だけど今度は退けなかった。こんな姿だけは見られたくない。

……嫌われなくなかった。

私の心は、戦と血で凍ってしまったのだと思っていた。人を愛せないのだと、だからレインハルトを受け入れられないのだと。

違った。

思い描いていたものとは少し違ったけれど、昔憧れた、あの感情をきつと今の私は……知っている。

「やめろ。離せ！」

気付いたら、叫んでいた。その声に彼が怯んだ一瞬の隙をついて、その手を抜け出す。隣の部屋で物音がして気配が動き、慌てて軍服を羽織ったところで再びレインハルトに腕を取られる。部屋のドア

が開け放たれたのは、丁度それを振り払おうとした瞬間だった。

「どうした、エド」

飛び込んできたライが、私の姿を見て絶句する。その後ろに咲良の姿も見えて、私は今一度レインハルトの腕を振り払うと、羽織っただけの軍服を掻き合わせた。こんな醜態、弟にも見られたくはなかったが、事情を知らないだろう咲良にはもつと見られなくなかった。「無粋な真似をするね、ライオネル」

「……貴方こそ妙な真似をしないでもらおうか。いくら婚約者といえど祝言も前にこのような不貞を働くなど、エンズレイの名も地に堕ちたものだな」

「ハーシエン家の方は躑がなっていないようだ。義兄に向って随分な口の利き方をする」

レインハルトとライが、冷え切った言葉を投げ合う。だが本当に興ざめしているレインハルトに対し、ライは明らかに頭に血が上っていた。本当なら私が止めなければいけないのに、動けないし声も出なかった。……咲良が、どんな顔をしているのか、それさえ確かめることができなかった。

「僕は貴方を義兄などと認めた覚えはない！」

「ならばこんな曰くつきで傷だらけの女、他に誰が娶ると？」

ついに激昂したライに、レインハルトが冷たく言い放つ。ライに向かつて言っていないながら、彼の目は私の方を向いていた。単なる挑発だっただろうし、既に何度も浴びせられている言葉に今更私を感じることは何もないけれど、挑発をもろに受けてしまったライの顔が傍目にわかるほど強張る。それで、私はやむなく仲裁に入ることにした。

「ただ、実際に止めなければいけなかったのはライの方ではなかった。ただ、」

ふと、気配が動く。振り向いた先で、咲良が固めた拳を振りかぶっていた。今まで見たこともないような、憤怒の形相で。

「咲良！」

そんな咲良はまるで別人のようで、一瞬呆けてしまったがそんな場合じゃない。だけど咄嗟にできたのは叫ぶことだけだった。結果止まらなかつた咲良の拳を、レインハルトが片手で受ける。

……敵う相手じゃない。私ですら、レインハルトが相手では五分五分だ。そして彼は気分を害した相手に容赦はしない。それが、赤い瞳を持つものなら尚。例え咲良が何もしていなくても、それだけでレインハルトはきつと。

「赤い瞳。魔女など飼ってどうするつもりだい、エレオノーラ？」
涼やかな声とは対照的な殺気が、私の考えを肯定する。その瞬間、迷わず私は服から手を離して叫んでいた。

「やめろ、レインハルト！」

羞恥心や自分の立場など、どうでも良い。

今まで守ってきたもの全てが、些細なことにしか思えなかつた。

咲良がいなくなってしまうことに比べたら。

「咲良は魔女ではない。彼に手を出すなら、私が相手だ」

レインハルトが、珍しく戸惑ったように私を見る。きっと私の気が触れたのだとも思っているのだろう。そしてそれは間違いじゃない。今の私に咲良より大事なものはなくて、私自身がそう感じる自分に戸惑っているのだから。

膠着はしばし続いたが、ややあってレインハルトは咲良から手を離した。

「わかつた、帰るよ。そもそも、言伝を持ってきただけだしね」

両手を上げてそう言ったレインハルトにもう戦意は感じられなかつたが、咲良への敵意は消えていなかった。それを感じていた私は、彼が退室するまで剣を手放すことはできなかつたが。

その気配が完全に消えてしまつて、ようやく剣から手を離しても、険呑な空気が消えることはなかつた。

「……何されたんだよ」

「君には関係ない」

そんなことを問いかける咲良に、私が返した言葉も声も酷く冷た

いもので、自分自身そのことに驚いていた。

本当は嬉しかったのに。

戦うことにあんなに臆病だった咲良が、自分の身も顧みず私のために怒ってくれたことが、……凄く嬉しかったのに。

だが、だからこそ彼の顔を見ることができなかった。いくら彼が純朴だと言っても、この状況で察しがつかないほど子供ではない筈だ。責められても優しくされても辛い。突き離すしかできなかった。

「……エドワード。レインハルトからの言伝とは何だったんだ？」
だから、間に入ったライの声が、この上なく有難かった。

「ノイシスを落として帰還するようにと、父上が」

「やはりか……」

そう言うところを見ると、ライも時間をかけ過ぎている自覚はあったのだろう。

「どうするつもりだ？」

それでもそんな問いかけをしてくるということは、やはりライが時間をかけていたのは私の為、なんだろうか。見慣れた弟の鋭いだが優しい瞳を見ていると、その答はもう解りきっていた。

熱くなっていた頭と心が落ちついていく。自分の気持ちを偽れなくなっているのも事実だが、ライは私にとって大事な可愛い弟で、それもまた事実だ。

「一晩考えさせてくれ。少し、一人になりたい」

ライは何か言いたげにしていたが、私の様子で察してくれたのだろう。咲良を連れて踵を返す。

そのことに安堵していた筈なのに、ただどそうではない部分もあった。

一人になりたかったのは、一人になりたくなかったから。泣いて縋ってしまいたいという気持ちを感じたから。まるでそれを見透かしたように、偽りきれない私の視線を咲良が拾う。

「エ」

呼ばれたら、もう強がれなかったかもしれない。

だがその声は、強張った表情のライが再び部屋に戻ってきたこと
によって掻き消された。

「エドワード、前線が突破された。フレンシア軍がこちらに向けて
進軍している」

告げられた言葉に、唐突に現実を引き戻される。

「フレンシアからの布告だ。 『リディアーヌを取り返しに行く』

」

奇妙な布告は、一つの可能性を嫌でも私に突きつける。含みのあ
るライの声は、彼も同じことを考えていることを示している。

でも、そんなことは関係ない。やっと、ざわついていた心が穏や
かになった。

そう。ヴァルグランドの為に戦場で剣を振るうことが私の使
命。

私は、ヴァルグランドの英雄黒太子だ。その名にかけて、戦うだ
けだ。

例え、咲良が何者でも。

第二部 第十二話 想い、すれ違い〜エドワード視点

「……怪我、大丈夫？」

ぼそぼそと、唸るような声が聞こえる。

注意しなければ何を言っているかわからないような声を、一字一句漏らさず聞きとってしまってから、私は聞こえないふりをした。

見なくても、動揺しているのが伝わってくる。案の定、なかなか次の言葉を継げない彼に、私は助け舟を出してやることも、そちらを向いてやることさえもしなかった。そんな私の態度を、咲良はきつと、怒っていると思つに違いない。

「ええと……やっぱり、怒ってる……よな」

相変わらずぼそぼそとはつきりしない声を、やはり私は一字一句違えず聞きとつて、ため息が零れた。

いや、実際怒っていた。

だけどその理由は、多分咲良が思っているものとは違う。

咲良は多分、フレンチシアの人間であることを黙っていたことを私が裏切りだと言つても思っているのだろう。

だが、書状に咲良の名を見つけたとき私に湧いた感情は、怒りではなかった。

怒りでも恨みでも、ましてや憎しみでもなかった。あらゆる負の感情を拳げ連ねたところで当てはまりはしないだろう。

だが、嬉しいというのともまた違った。結局、どんな言葉でも形容できない感情だった。

そんな感情で手が震えたのを咲良は知らない。

そのせいで返事を書くのに酷く苦労したのを知らない。

あのそつけない文面を、どれほどの思いで書いたのか、ちつとも知りはないのだろう。

なのに咲良は、私がいなくても、私が守らなくても、平気そうだから。

恨み事のひとつも言いたくなる。

「当たり前だ。君が待っているというから待っていてみれば、フレシア軍から君の名前で書状が届くわ、来てみれば可愛い娘と楽しげに話しているわ。これで怒らずして何で怒れと？」

「ご、ごめん！ 今まで黙っ……て、え？」

ほら、やつぱりだ。

咲良がなにか隠していることは薄々気づいていた。というか、咲良はなんでも顔に出過ぎる。そんな彼が、私を陥れようとして黙っていることなどできるわけがない。そう思って触れずにいただけだ。今だって、狼狽しきっているのが見てわかる。だが彼のそんな様が可愛くて、許してしまいそうになるのが悔しいので、さっさと話題を変えることにした。このあたりが私が可愛げないと言われる所以だろう。

「それで、私に話とは？」

「ちよっ……、ちよっと待ってよ。それだけ？ 俺、助けてもらっ
といて、何も言えなかったのに」

そんな私の言葉に、咲良はますますうろえたようだった。むしろ私より咲良の方が、隠していた事実胸を痛めていたのではないだろうか。

「見くびるな。君が何かを隠しているのは知っていた。……言っただろう、君が魔女でも構わなかったと。助けたのも守ったのも私の勝手だ」

今更だが、せめて咲良が罪悪感を持たないようにはっきりと伝えておく。

全部過去形にしたのは、守らせてくれない咲良へのちよっとした当てつけだったが、それに気付いたかどうかは分からない。頂垂れるばかりの様子を見るに、多分気付いていないだろう。

鈍いわけではないと思うが、咲良は自分に自信がなさすぎるのだ。確かに戦えば私が勝つだろうが、戦ばかりの私と戦ったことのない咲良では、そうなるのは至極当然のことだ。咲良だって決して筋

は悪くない。私の部下なら期待して育てたところだ。けれど彼の世界では戦う必要がないのだから、その力が延びないのは当たり前だし、延ばしてやるつもりもない。

それだけのことで、戦しかできない私に比べ、咲良はそれ以外のものなら何でも持っているように私には見える。

それを貰う代わりに、私は私にできることで返したいから、守ると言っているのに。

でもそれを言ってもきつと、咲良は納得してくれないのだろうけれど。

「……話、だけど」

訪れた沈黙を、そんな切り出しで咲良が破る。

「ノイシスへの進軍を待つて欲しい。俺はその間にフレンシア国王を説得して、戦争を止めてもらおうと思ってる」

「なんだと？」

そうして彼が口にしたのは、予想もしていなかったことだった。

「こんな戦争、もう終わりにしよう。こんなこと何百年も続けてるなんて馬鹿げてるよ」

私が心の奥底で思い続けながらも、決して言葉にできなかったことを、あっさりと彼は言つてのける。私が思い続けながらも、どうすることもできなかつたことを。

いつもはそれが心地よいのに、このときばかりは苛立ってしまった。た。

二つの国を数百年に渡つて縛つた憎しみを、今更誰かにどうにかできるわけがない。そんな途方もないことの為に

「君はそんなことの為に、私の元を出て行ったのか？」

堪え切れずに私は口を開いた。自分で思ったよりずっと冷たい声が出た。

今この瞬間こそ、私は怒っていたかもしれない。

「そんなことって」

「いや、済まぬ。言い方が悪かつた。……そんなことが本当にでき

るでも思っているのか、君は」

さすがにきつく言い過ぎた自覚はあったので詫びはしたが、気はおさまらなかつた。

元の世界に帰る為と。彼を戦から離す為ならと、その為であればこそ、引き止めなかつたのに。

出来る筈もないことの為に戦いに身を投じるといふなら、力尽くでも行かせなかつた。

抗議の意をこめて咲良を見据えると、視線が逸れる。

「君や私が何かしたところで、この根の深い憎しみ合いは、終わらぬ」

でも、責めたいわけではないのに。

結局、あのときも、今も、私は肝心な一言が言えないだけなのだ。これでは萎縮させるだけだと反省しかけたが、意外にも咲良は私に食らいついてきた。

「そうかもしれない。でも何もしなかつたら確実に何にもならない。俺は、ただ流されて死ぬなら、せめて足掻きたいと思う」

何故、そこでそうなるんだ。私を信用していないのか、侮っているのか。確かに負傷はしたが、約束通りにフレンシア軍は押しとどめた。なのに何故、死ぬ前提で話をするのか理解できない。

「だから、私が守ると言ったんだ。傍にいれば死なせたりなどしない」

苛立ちを隠さず言うと、同じくらい苛立ったように、きつと咲良が私を睨んでくる。

「いつまでだよ？」

そう噛みついてくる咲良に何も答えられないのは、答えを持ち合わせないからじゃない。咲良が私に対して声を荒げたことが今までなかつたから。戸惑う私に、だが畳みかけるように咲良の怒号は続く。

「いつまでも傍にいられるわけじゃなかつただろ。それともあのまま傍にいて、黙ってあんたが戦場に行つて怪我するのを見て、その

後は他の男の物になるのも黙って見てるって？ 冗談じゃない。俺はあんたの飼い犬じゃないんだ！」

その、言葉のひとつひとつが。

刃となつて体中に突き刺さるようだった。それは直接斬られるよりもずつと痛くて、立っていることさえ苦痛だった。

咲良の言う通りだ。いつまでも私が守れるわけじゃなかった。なのに、傍にいられることに甘えていた。咲良が去った後、寂しさに気が狂いそうでした。出て行ったことを心のどこかで責め続けていた。

でも、私が咲良に傍にいて欲しいと願って、そして咲良も同じことを私に望んでくれたとしても、私にはそれを叶えることはできなかった。

せめて許される間だけ。それで私は満たされても、咲良が満たされるわけじゃない。

私は、自分のことしか考えていなかったのだ。怒鳴られてやつと、そのことに気付いた。

「ごめん、今のは忘れて。話を戻そう」

愕然とする私を慮ってくれたのか、咲良は詫びてくれたけれど。

彼が私を責めるつもりなどなかったことは最初から分かっている。むしろその逆だったから、痛かった。

戦より婚約者よりも咲良を選べば傍にいてくれるというなら、あれは責め句ではなく酷く遠まわしな告白だ。

……逃げられるなら逃げたい。咲良の傍にずっといたい。だがそれでも、私には応えることができなかった。

結局私は、国を、父上を、レインハルトを裏切ることにはできない。私は私を育んだこの国を愛しているし、不器用ながらも父上が私を愛してくれているのを知っているし、異端者である私を一途に想い続けてくれるレインハルトに感謝しているから。

そう思う一方で、ヴァルグランドに縛られるこの身が酷く煩わしかった。女を棄ててしまったことも、この手が血塗れなことも、初めて悲しいと思った。

どの道、そんな私は咲良に相応しくはない。私だけでなく、争うばかりのこの世界も。

咲良はこんなところに居てはいけない人だ。その思いが、すっかり乾いてしまった私の口を動かした。

「……君は、元の世界に帰りたいのではなかったのか？ この世界の争いごとなど君には関係ないだろう。どうしてそんなことに首を突っ込んだりするのだ」

それは咲良の欲しているような答ではなかっただろう。そう言った私に、咲良は不満気にしながらも落ちついた声で答える。

「帰りたいよ。だから戦争を終わらせる。俺は、リディアーヌの遺志を継ぐためにこの世界に呼ばれたんだ。戦争が終われば彼女から解放される筈だ」

「ならばこんなまどろっこしいことをせずとも、私の首を獲った方が早いではないか。その機会は君ならいくらでもあった筈だ。何故そうしなかった」

咲良は、私を傷つけずに戦いを終わらせようとしているのだ。分かっている、敢えてそんな言い方を選ぶ。だが言ったことに嘘はない歩み寄るには時間がかかるが、どちらかが勝利すれば戦など今すぐにも終わる。さすがに今ここで首を渡すことはできないが、せめて咲良が私と戦う意志を持ってくれればと、そう思った。だが。

「っ、いい加減にしろよ!? 馬鹿なこと、を」
激昂する声が、途中で消えた。

そのまま、まるで糸が切れたように、咲良の体が大きく傾ぐ。

「咲良!？」

驚いて、咄嗟に手を伸ばした。咲良の身に何が起こったのかわからない今、そんな場合ではないのに

触れた指先が熱くて、一瞬ぶつかった視線が愛しくて、思わず抱き締めてしまいそうになる。

でも、かすれた警告がそれも止める。

「駄目だ、エドワード、俺から、離れ」

理解するより前に体が動いていた。それは理由があつてのことではなく、何度も潜った死線の中で身に着いた、いわば勘。

咄嗟に手を離して体を引く。凍るような殺気を感じたのは、その後だった。もう少しそれに気付くのが早かったところで、それを咲良と繋げることが刹那のうちにはできなかつただらう。

「……ようやく会えましたね、黒の悪魔^{ノワール}」

そう囁かれてやつとのこと、私は状況を理解したのだから。

日常編その3〜エドワード視点

吐き出す息が白く濁る。

ヴァルグランド全土に置いてあまり温暖な地域はないが、この辺り フレンシアとの国境付近はその中でも冷え込む方だ。といっても命に関わるほどでもないから、私も兵たちも慣れたものだが、咲良には少しこの気候は厳しいらしい。

「ここって、寒いよね……。いつもこうなの？」

自分の体を抱きながら、寒そうに咲良が私にそう訊いてくる。

「まあ、近頃は少し冷え込むが。大体いつもこんなものだ」

答えると、彼は残念そうに項垂れた。私は咲良の元いた世界を知らないが、世界が違うのだから環境だって違うだろう。ここで生きている私達にとっては大したことでなくとも、いきなり放りこまれたであろう咲良には命に関わるかもしれない。そういえば先日も熱を出したばかりだ。私に遠慮して苦痛を我慢しているのではと、急に不安になった。

「寒いのか？」

「少しね。ストーブとかあったら嬉しいんだけど」

「すとーぶ？」

「うん、ないよね、わかってた」

心配して問いかけると、聞いたことのない言葉を返してくる。それがどんなものなのか私には想像もつかないが、とりあえず返ってくる声の調子からするに、体調が悪いわけではなさそうではっきりする。

それでも、いつ体調を崩すかはわからない。何しろ咲良は線が細いし色も白いし、見るからにか弱そうだ。ライも細いと思っていたが、身長もない分、咲良は余計危うく見える。まあその小さいところが可愛いのだが。

「この皆は大きい方だが、所詮は攻防用の皆だから……。確かに

過ごしやすくはない。不便をかけて済まん」

「いいよ、我慢できないほどじゃないし」

温めてやりたいけれど、そう設備や物資があるわけでもない。兵達でさえ毛布一枚が関の山だ。誰であれ特別扱いというわけにもいれない。できることと言ったら

「なんなら、今晚も一緒に寝るか？」

「いや、いいです！」

「冗談混じりに言ってみると、途端に咲良が悲鳴じみた声を上げる。その照れた様子が愛らしいので、からかうのをやめられない。だがからかい混じりではあったが、実際に一緒に寝てくれるのならそれはそれで大歓迎だ。昔よくライに添い寝してやったことを思い出して懐かしい。あのときのライみたいに、咲良は小さくて可愛くて温かくて、ぎゅっとしてしていると落ち着くのである。」

咲良は私とひとつしか歳が違わないと言い張るが、未だにそれが信じられない。二つ下のライよりも、咲良はさらに下に見える。十六というのが本当だとしたら、一体どれだけ童顔なのか。羨まし……いや、ともかく、最初会ったときは下の妹と同じくらいだと思っていたので、どう上にもせいで十二歳くらいにしか見えない。ともかく恨みがましい視線を感じたので、私はそちらに　咲良の方に向き直った。

「いや済まん。可愛いからついつい」

「……それ、フォローになつてると思ってる？」

「そう怒るな。……寒いなら暖を取る方法はあるぞ」

すっかり腐ってしまった咲良に、だが私は良案を思いついて踵を返した。他にも暖をとる方法はある。

「呑めば温まる」

本来軍に嗜好品は厳禁だが、冷え込むときに暖をとる手段として酒の備蓄はある。それを手に取って咲良に差し出すと、彼は慌てたように両手を振った。

「いやいや。俺未成年だし」

彼の言葉に首を傾げる。確か十六と言っていたと思うのだが、やはりあれは嘘だったのだろうか。それとも、成人の基準がことは違うのだろうか。

「確か咲良は、十六と言っていないかったか？」

「う、うん……」

「ヴァルグランドでは十五で成人だ。それに、酒で暖を取るのに歳は関係ないだろう」

実際のところはわからないが、咲良の嘘は分かりやすい。十六と言ったときの咲良が嘘をついているようには見えなかったし、どちらにしろ酒で寒さを凌いだからといって咎められることはない。そう言っても、咲良は首を縦には振らない。

「でもやっぱり酒はやめとくよ……。俺、弱いんだ」

何かと思えばそんなことが。

「だが、寒いのだろうか？」

言いつつ、先に私が一口飲んでみせる。

正直、私は酒に酔ったことがないから強い弱いの判別はつかぬのだが、暖をとる為に支給されている酒がそう強い筈もない。と、思う。

「そう強い酒ではない。いくら弱くとも一杯くらいでは酔わぬ」

「う……」

それでもまだ頷かない咲良を見ていたら、悪戯心が沸き起こった。

「それとも、やはり一緒に寝るか？」

「いただきます」

顔を近づけてそう言つと、即答して私からカップを取る。

期待通りの反応に思わず笑つと、彼はそんな私をやはり恨みがましそうに見たが、その後は覚悟を決めたように一気に酒を煽る。無理して一気に飲まなくてもいいのに、そういうところがなんとも可愛い。

「な、大したことないだろう。温かくなったか？」

そんなわけで上機嫌で笑いかけるが、咲良が答えることも、笑つ

てくれることもなかった。

たった一杯しか飲んでいない筈なのに、顔が真っ赤で、目なんて据わっている。

そんな表情は、彼の幼さを綺麗に掻き消している。

呆然とする私の前で、荒い息を吐きながら、咲良が上着を脱ぎ捨てる。

「さく」

そうして突然掴みかかれて、声は途中で途切れた。何が起こったのかわからぬままに、足を取られてバランスを崩す。この私のだ。

あっさりと転倒させられて背中からソファに落ちる。

そんな事実も状況も、まだ飲み込めずにいた。だけどきっと、逆らおうと思っただけでできた。腕を振り払うことだって簡単にできた筈だ。だけど、体が全然動かない。

違う。動かないんじゃない。勿論、動けないのでもない。

「……まださむいから、」

別人のように大人びた『男』の顔で、私を組み敷いて、咲良が呂律の回らぬ舌を動かす。

「あつためて」

瞬間、体中が熱くなる。

顔を近づけられても、背けることもできなかった。

それは、驚いたからでもある。でもそれは一番の理由じゃない。

むしろ、その一番の理由に、何より驚いていた。

そうして動けないままに、咲良からふっと力が抜ける。

「……咲良？」

咽に張り付いて出なかった声が、ようやく唇を滑る。だけど返事はなかった。代わりに規則正しい寝息が聞こえて嘆息する。私に覆い被さったまま、眠ってしまったようである。

起き上がろうとすると、脱力しきった咲良が私の上から滑り落ちる。このままではソファから転落してしまうので、慌てて両手で彼

の体を抱える。ここで目が覚めれば、さぞ可愛い反応をしてくれることだろうが、何をしても目覚める気配は全くなかった。

「……私の負けだ」

眠る咲良の顔は、いつもの通りあどけなくて可愛らしかった。

ただどそんな彼をつい抱き締めてしまったのは、弟の面影を見たからでも、その愛くるしさからでもないことは、認めざるを得なかった。

だから、私の完敗だ。

第三部 第十七話 幕引き〜レインハルト視点

エンズレイ家次男。それはオレにとって烙印に等しかった。

生まれた瞬間から下等生物だと突きつけられたのだ。エンズレイはハーシエンの影。覇権とは縁のない日陰の家名。だが、その日陰の頂点すらも兄上に譲らなければならなかった。

どれほどの才能も努力も無意味な、下らない世界。

「影より光が勝っているなど誰が決めたの？ 夜は毎日訪れるというのに」

そんな下らないオレの世界に光を差したのは、闇色をした女だった。

頂点は余りにも低いところにあった。

エンズレイのそれすらも諦めたことがあったなど、今となっては馬鹿らしい。ヴァルグランドやフレンシアさえ今のオレには小さな国のひとつでしかない。木偶人形のように足元に転がるのが、今まですべての頂点に君臨していた者だというのだから。

「笑えるな。こんな臆病者の国を、今まで恐れて踊っていたなど」
そう口にすれば、実際に笑いがこみあげてきた。こんな茶番劇があるだろうか。これなら今まで戦で剣を交えた中にもう少しマシな者はいた。

一夜にして国を滅ぼすだの永劫を生きるだの、思いだすにつけ笑いが止まらない。こんなに脆いものが一体どうしてそこまで人々を畏怖させ、国々の上に君臨したのだろう。

そう考えたときふと笑いは止まった。

その噂が本当だとすれば、まだ皇帝は死んではない筈だ。フレシアの魔女ごときでも蘇るものを、かのルゼリア皇帝陛下ができぬわけもない。思いなおして足元を注意深く見下ろすが、さっきまではぶつぶつと呻いていた皇帝は、どう見ても完全に事切れていた。「おい、まさか本当にこれで終わりか？ ルゼリアの奇跡の力とやら、オレはまだ見ていないぞ」

爪先で小突いてみても、何の変化もない。それで確信した。どんな理由があっても、頂点を見たものがこんな屈辱を甘んじて受ける筈もない。だが皇帝の死を確信したところでオレに沸いたのは今度は笑いではなく、どうしようもない怒りだった。

「こんな……、こんなものか。こんなにも脆いものに、今までオレ達は踊らされてひれ伏してきたというのか！」

体の内側から沸き起こる衝動に任せて、木偶人形を踏みつける。だがどれほど痛めつけても怒りは消えなかった。ただどうしようもない憤りと虚しさを引き連れてくるだけだ。

こんなものが、今まで眩しくて見えなかった頂点だと。手が届かないと思っていたものなのだと思うと目眩がしそうだった。

ああ。確かにあいつは正しかった。

例え影だろうが日陰だろうが、オレが『弱者』である理由にはならない。

狂うかと思うほどの激情がゆっくりと収まっていく。別に怒る必要などなかった。全てを手に入れたかったのは、覇者になりたいわけではない。こんな下らない世界の覇権など、オレにとってはとうにどうでも良いことになっている。

「下らん。こんな上辺だけの帝国を恐れる陛下も、無血主義の弱々しいフレシア国王も、臆病者のルゼリア皇帝も……どいつもこいつも下らん。ならば俺がこの玉座におさまるのが一番ふさわしいと思わないか？ エレオノーラ」

オレにとって唯一意味のある名前を呼ぶ。ここまでは全てオレの望んだ通りだ。だが振り向いた先にあったのは、それとはかけ離れ

たものだった。

「いまやルゼリアさえもがオレの前にひれ伏したというのに……、お前は何故そうなんだ」

心を落ちつけたのと同じ筈の群青色が、今度はさっきよりも激しく心をかき乱す。

酷く冷えた瞳。いつからだったか。お前がそういう視線しかオレに向けなくなったのは。

その言葉を噛み殺して、皇帝の体を踏み越える。皇帝も玉座もなんの価値もない。階段をおりながら、エレオノーラの冷えた群青の瞳に端的に問いかける。

「一体俺の何が不満だ？」

「不満などない。だが頭で納得しても、体を従えても、心がなびかぬ」

答はすぐに返ってきた。決して認めたくない、理解したくもない答が。ぎり、と奥歯が軋む。

「ならば何故、魔女紛いの男などに心を砕く？ まさか本当に籠絡されたのか？」

「それを言うなら、お前こそ何故そんなに私にこだわる。籠絡した覚えはないのだがな」

エレオノーラが一步後退する。考えていることなど手に取るように解る。この期に及んで、オレと戦おうというのだらう。

全てが思い通りになると思うほどオレは浅はかでも傲慢でもない。そんなことは産まれたときから知っている。どんなに取り繕おうとオレは劣等感の塊だった。だが手に入れたいと望めば、どんな不可能でも必ず手が届く時は来ると、そう信じていただけだ。そうしてオレは頂点をも手に入れた。

なのに、どうだ。

実際に手にいれたかったものは、どんどん遠ざかっていく。

そして、オレよりも何も持たぬ男が何の労力もなく攫っていく。

戦ってきたのも強く在ろうとしたのも、頂点に立ちたかったのも

全ては　オレにその強さをくれたたった一人の女の為だった。なのに今同じ女が、そんな理不尽を突きつけてオレの全てを壊そうとする。こんなにもオレを翻弄して、籠絡した覚えがないなど……お前は本当に、笑わせてくれる。

「……されているさ。十数年も、オレは……」

影より光が勝っているなど誰が決めたの？　夜は毎日訪れるというのに。

十数年経っても、その声も、その瞳も、その髪も、色褪せない。いつでもそれがオレの全てだった。

だからこそ、許せない。どうしても譲れない。

隙を見せてやると同時に、エレオノーラが走る。こんなにも解っているのだ。強さを全て自分で決めてしまうお前が、オレになびくことなど絶対ないと。解っているのだ。

「お前はオレに逆らうことしかしない」

「お前はそれをただの一度も受け入れはしないじゃないか」

エレオノーラの手が剣を掴むその手前で、剣を蹴り飛ばす。勝敗がついたのに、髪を掴んで引きずり上げても、彼女の目は力を失わずにオレを射抜く。最後の最後まで逆らい続けることを知っているのに止まらない。そんなオレはさぞ無様なことだろう。それを自覚して、ようやく利きかけた歯止めは次の瞬間吹き飛んだ。

「ッ、やめ」

世界も生きること最早どうでもいい。だが、誰かにくれてやることだけは、どうしても許せない。

「ならば、お前の心にオレだけが残るまで、それ以外の全てを奪ってやる」

どんなに無様でも構わなかった。

オレが走ると同時にエレオノーラも走る。それを気配で感じながら、剣を握り直す。

こんなに心が乱れているのに頭は冷静だった。やはり解ってしまっただ。お前はどうせ、身を挺して、お前の心を奪ったものを庇お

うとするのだろう。

大嫌いだ。

オレよりもずっと強いくせに、簡単に自分の身を投げ売ってお前が、ずとずと大嫌いだ。そしてそれを全て凌駕するほど、愛していた。

……殺してしまおうか。恐らく、手に入れられる方法はもうそれだけだ。

けれど葛藤する必要もなかった。殺せるわけがない。

殺すつもりで振り下ろした剣は意志とは関係のないところで止まった。

このオレが愛した者が幸せを得ぬまま果てる世界など、認められるわけがない。

記憶と違わぬ声に名を呼ばれ、記憶のままの瞳がこちらを向く。

驚く程満たされた。

どれほど近づいてもどんなに抱いても決して満たされることのない思いが、こんなに簡単に。

さあ、幕引きだ。

オレは全てを手に入れた。

第二部 第十一話 再会／ライオネル視点

このあたりでは珍しいくらいよく晴れた青い空は、見上げると目に染みる程だった。

こんな空を見ると、幼い頃を思い出す。

天気の良い日は、よく姉さんが外へと連れ出してくれた。父上に隠れ菓子を焼いて、母上の庭園で兄弟四人でそれを食べた。

妹は、それを子供っぽいとよく馬鹿にしていたが、その実誰より楽しみにしていたのは皆が知ってることだ。天気がいいと、よく何か言いたげに姉さんの周りをうろうろしてた。

無理もない。いくら意地を張っていても、母上が亡くなったとき妹はまだ小さかった。……僕もだ。

僕たちは姉さんに母さんの面影を見てしまった。だから姉さんは、姉であると同時に母でもあるうとしてしまった。

でも、姉さんだって本当は 誰かに甘えたかった筈なんだ。

急に青空を見ているのが辛くなる。俯くと、僕は背にして腰を下ろした。伸び放題の草が手に触れて、意味もなくそれを掴んでは千切る。

そうしながら、僕はただ姉に甘えてはしゃいでいた幼い日の自分を呪った。

姉さんは決して甘えなかった。泣かなかった。いつでも優しく、強かった。

そんな優しい人だから、母上だけでなく、兄上の隙間までもを埋めようとしたんだ。自分が傷つくのも顧みずに。本当は、それは僕がやらなくちゃならないことだったのに。

「……………ッ」

手元から草がなくなっって、その手を苛立ち任せに背に叩きつける。今にも崩れ落ちそうなくせに、渾身の力で殴ってもびくともしなかつた。ただ手の甲がひりひりと痛んだ。目をやると、皮膚がところ

どころ破れて血が出ていた。

こんなもの、姉さんが戦で流した血に比べれば、その一滴にも満たない。

痛みのうちではない筈だ。……だけど。

「……痛い」

「なにしてるんですか」

突然声をかけられ、内心焦ったがそれを顔には出さずに振り返る。砦の陰から、咲良の従者がこちらを見ていた。

「お前こそ何をしている、小娘」

そう返すと、その小娘は憤慨したように目の前に飛び出してくる。「こ、小娘ですって？ ヴァルグランド軍って本当に礼義知らずなんですわね！」

「小娘だから小娘と呼んだまでだ。そもそもお前の名前など知らん名前と呼ばれたいなら名乗れ」

きんきんと喚かれ、思わず両耳を塞いだ。……こういうタイプの女は苦手だ。年頃といい、居丈高に怒鳴りつけてくるところといい、妹を思い出す。

「人に名前を聞かずに自分が名乗ったらどうですか！」

「別に聞いてない」

見当違いの要求を切り捨て、僕は立ち上がった。小娘がびくつと体を震わせて後ずさるが、別に危害を加えるつもりなど毛頭ない。ただ煩いので場所を変えようとしたのだが、歩き出しても怒鳴り声は追い掛けてくる。

「ば、馬鹿にしないで下さい！ 私が戦えないと思って馬鹿にしているんでしょう？ 私だって戦えます！」

だが、敵意と憎しみの飽和した声に、歩みを止める。振り返っても、今度は彼女は震えなかった。双眸には涙が浮かんでいるが、すんでの所でそれを流すのも耐えている。

「……お前の主は、戦いに来たのではない筈だが」

「でも、でも、ヴァルグランドは家族の仇です！ リディアーヌ様

には従うけれど、私、やっぱりヴァルグランド軍は許せない！」

年端もいかぬ少女から向けられる深い憎悪は、不釣り合いなだけにすら寒いものがあつた。だが、敢えてそれを真つ向から受けて見せる。

「そうか。だが僕の母はフレンシア軍に殺された」

怯んだのは小娘の方だった。

数歩距離を詰めると、小娘は一步だけ後ずさつたが、それでも憎しみの消えない目がこちらを射抜いて、それ以上は後退しない。

「それでも、僕は僕の主が戦いを止めるといふなら止める。許せといふなら許す。だからこの会談の結果が出るまでお前とは戦えん。お前も従者として来たなら、軽率な行動は慎むんだな」

「な」

小娘が絶句する。何かを言おうとはしているが、全部言葉にはならず滑っていくだけだ。

嘆息して、僕はさつきと同じ場所に腰を下ろした。

しばらく、沈黙が流れた。

「……どうして、そんな風に割り切れるんですか。それとも、あなたにとっての家族って、簡単に割り切れる程度のもだったんですか？」

「簡単じゃないし、割り切ってもいない。ただ、お前が矛盾しすぎてるだけだ」

「どういふ」

「矛盾してるだろう。リディアー又は戦争を止めるためにこの会談を要求したんじゃないか？　なのにお前は戦いを良しとする。お前が信じているのは自分と主のどちらなんだ」

「え、う……」

小娘はついに呻くのみになって、ぺたりとその場に膝をついた。

その拍子に、溜まっていた涙がはらりと落ちる。それを見て見ない振りをして、またため息が零れた。

すぐ泣く女が嫌いというわけではない。むしろ、周囲にいる女性

が皆強すぎるので、いつそこれくらい素直に泣いてくれればいいと思う。その強さを尊敬はするけれど、弱味を見せてくれないことは励ますこともできない。

「そもそも、お前の主は誰なのか良く考えろ。フレンシア王なのか、フレンシアの魔女なのか、それとも今お前の傍にいる者なのか。誰かを信じ付き従う生き方を選ぶなら、揺らぐな。それができないなら、お前は楽な方へと逃げていただけだ。そういう奴は、最終的に誰かがこう言ったからと逃げ道を作る」

反論はなかった。別に論争がしたいわけでもないからそれはむしろ都合が良かったが、ふと見るとさつき以上にぼたぼたと涙を流していて、思わずまた立ち上がってしまった。

「な、何故泣く！」

「だ、だって……、よくわからなくなっちゃって」

「わからなくなったら泣くっておかしいだろう！」

「なんでいちいち怒鳴るんですか！？ 今考えてるんだから邪魔しないで下さい！ 私だって、ちゃんと自分で考えられるんですからッ！」

今度はどうでもいいことで噛みついてくる。

理解不能すぎるのは、やはり数百年と対立する敵国の人間が故なのか。それとも

「くしゅん」

あれこれと分析するのを小さなくしゃみに遮られると、考えるのが途端に馬鹿らしくなった。羽織っていた外套コートを投げると、それにすっぽり覆われた小娘がその中でばたばたともがく。

「な、な、なんですか!？」

「お前煩いからその中で静かにしてろ」

ほら、もう寒くないでしょう

そう言っつて、自分の外套をこちらにかけて、姉さんが笑っていたのを思い出した。

思い出の中で姉はいつも笑っていたけど、その中に本当の笑顔は一体どれだけだっただろうか。そんなこと考えもしないで、無邪気に慕っていた。

……そのせめてもの、罪滅ぼしに。

僕は揺るがない。

姉さんの望むことを行い、

姉さんの行く道を拓く。

それは正義である必要もなく、そしてその先に僕の幸せも、僕の望みも必要ない。

ただ、姉さんの笑顔の為に。その幸せの為に。

それが、僕の全てだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151t/>

IN BLOOM ~ 聖少女と黒の英雄 ~ 番外編集

2011年11月18日01時44分発行